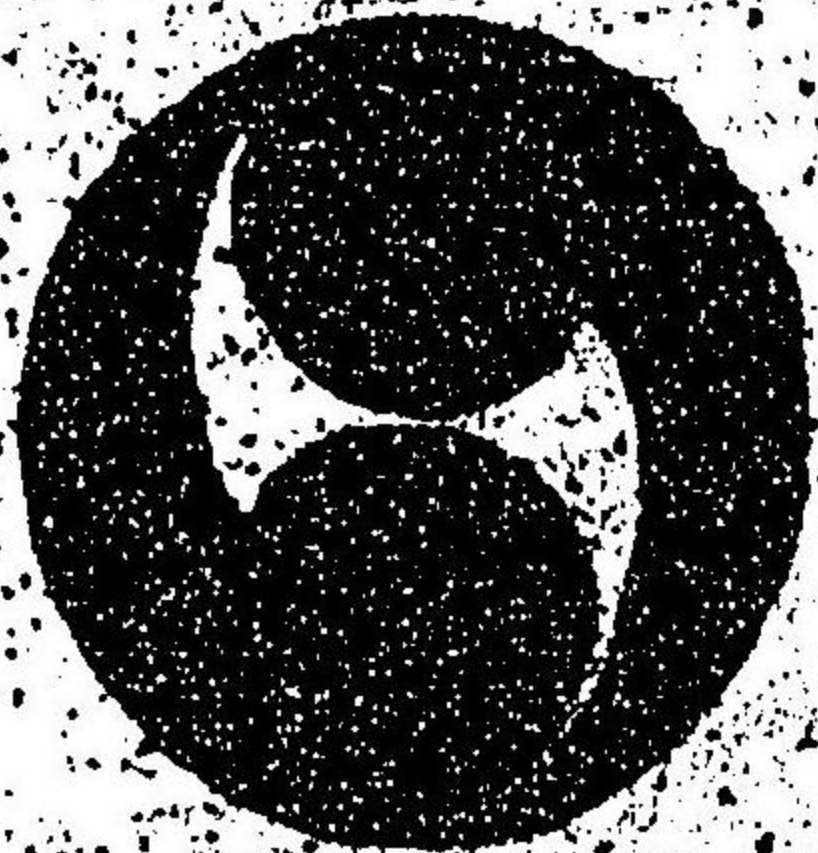


特 60

101



繪本志屋敷

三

全



大坂 長瀬松盛堂銅版製





繪本忠臣蔵第三篇

山岡寛兵衛妻義心

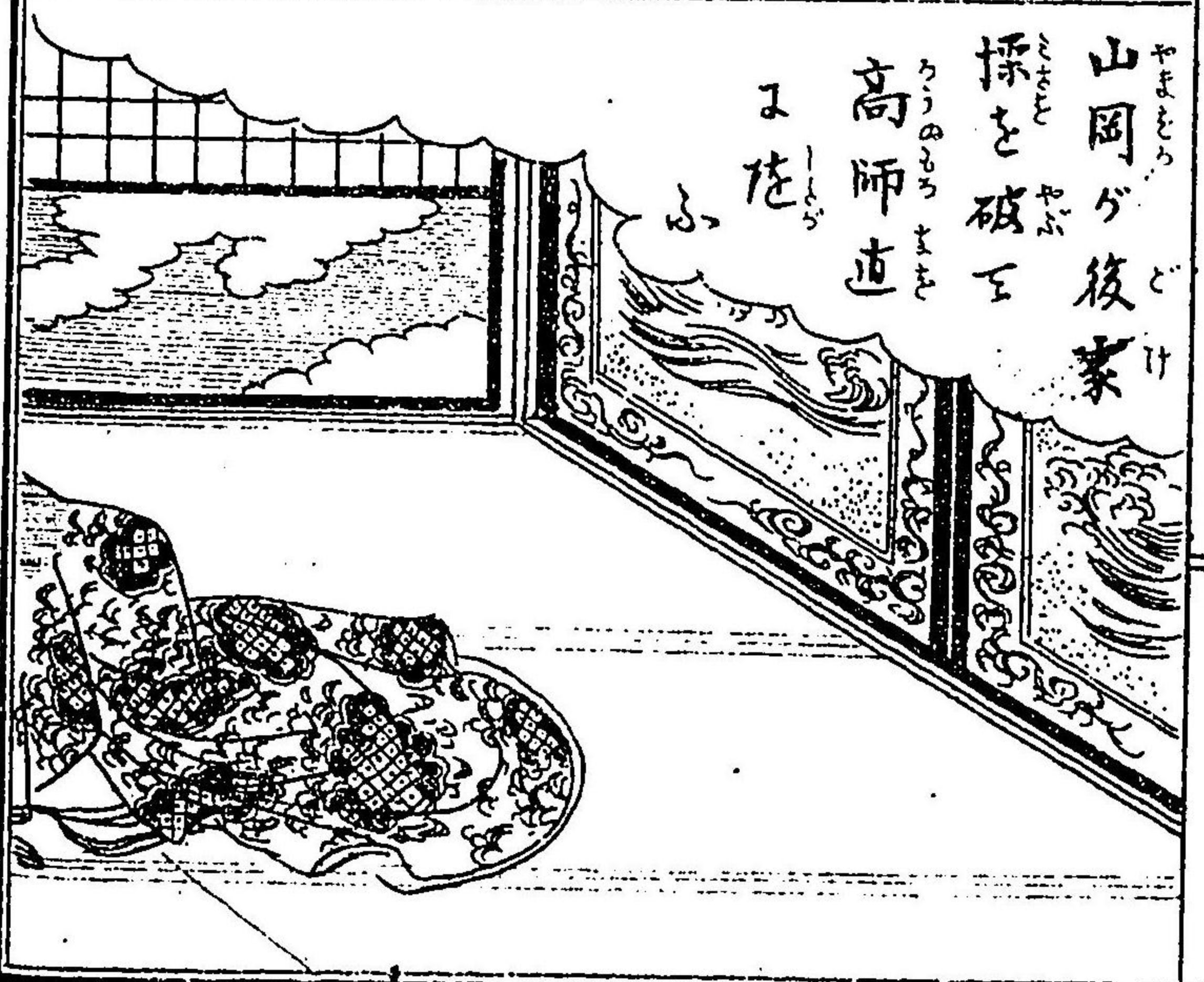
爰に盟會の美士は山岡寛兵衛と云ふ者あり
 伯父を去て山科の辺に位りしが十月の頃
 去つて妻尚寒の男子を抱て大星が宅に
 来り云ける夫覚を清比目存あるに卒死
 仕れり死る亦肌の守の中は亡君の清成を
 書其下は主君の御子共は天を裁きとて
 付置り覺を清存生の内何せん保難き事
 教多兄交いりて度々君は生れ死の如何に
 先立何事も生れ難きと申す居り我も片山判
 那が娘源治おろが妹成の善代お侍の清主君
 男子さへ中々の格有る物と羨るるは
 女は何卒は許を由良と云ふ様へ清頼りと下瀬
 余へはちよの命添きと申して山岡寛兵衛が



山岡寛兵衛が妻義心
 芳田近松鎌倉に到る
 堀部原の義を訪む
 寺井玄庭東行を望む
 大野父子家財を乞ふ
 大星力彌謙倉に到る
 大星程女に暇を告ぐ
 大高師直が在宅に知る
 大星高貞の後室に訪ふ
 諸士三ヶ所出立
 大星二國橋の勢を荷ふ
 諸士師直が家士と戦ふ
 堀部矢兵衛警家上り
 堀部矢兵衛勇戦
 諸士雜部屋にて本望と違ふ

諸士山科に大星に論す
 武森不破大坂に到る
 諸士丸山に冬令を
 近藤小山大星を討む
 天川屋儀兵衛が傳
 原柳右衛門が老母自害
 不義士并大山因金を盗む
 松村三太夫刀の研を試む
 諸士泉成寺に控て評定
 温化屋にて諸士集會
 諸士師直が才中を押入
 諸士勇戦鳥江討死
 近村左右因侍五郎と戦ふ
 諸士血戦

伴兼松討死ともいふ程にハ夫竟も湯未未
 の為我も泣き力も生残るべきや津先立込へま
 為し兼上はと大星が人術を弄し覺を湯お果
 とる日大星よりきせし春書兼家傳の則光の
 刀一腰しを添へて返り見をさしければ大星
 當を湯が卒死を悔し妻女も死んを源くろ
 んど女死さるる天曉の志兼松幸ハ松太夫
 りや下へ誠存付の幸あり兼余へ津越まで
 自分の御も五下へ彼地は子崎大星も位居
 ち用事ありハ彼方やさるべしと云ければ女大
 きは収て我存念を大星は告ぐ大星もその
 志を称し子崎方へも状を付妻女を兼余
 下しるさるバ師直が屋敷の用人もはは至り
 おしあるさ成けんバ子崎幸いと云はば乳母
 ありて活せし人何幸小る物の希用を女
 んを頼いければ江も吹巻は依て終は師直が



女中が屋へ小る物をさるて女中もえ入て山
 岡が後家を我妹と云立師直兼茶のるま
 公よさるは女が客色美兼松ハ師直が全
 入登教例を登さバ折は振戯れハ女も
 貞女の道を忠告の為し持師直がんも施い
 けるもは依て師直が屋敷の形勢いし
 て悉く兼士ホが掌事よぞ入りたる
 法士山科満大星
 去程は兼余が控て振る矢を湯同安と湯
 奥田孫太夫の兼士等家のかきは後知れ
 くれハ差事を見れば次才を京は告て赤
 行を執る事さき波を打て催促せるとい
 へども大星事を見がたる振子我ハハ大ま
 いうちらる家ハ竹敷善多ハハまては去年の
 兼余兼余よて傍部と依は肺肝を確ま
 ち人日産或時ハ七食と返才を交り歌を



伺ては坂部奥田と爲は法どくハ我
 叙り故なきいつまで空の日を過さんや
 金山科の了替 延利の事成ハ一先故郷
 向り京畿の同士を切由良介と利登
 利は堂を築て述は事果さんと社
 いはまて云々バ坂部奥田大は悦
 はんは叶へりも取違は初は事斗
 八ふたど大星借弱なりとも事
 む人々や利害を以て同士は告
 五こそ肝要と大きは閉て中
 老を言て抄は上洛せは速は同
 押付下向まへとまは元振は
 獨旗ハ傭るべとて不破教
 二月十八日鎌倉を立京
 されは京邸美士ホ鎌倉か
 ハ大きは勇とわとり京伏見大坂の同志ホ

諸士 山科



中合山科よ来てそと會
 事なきが法士は向て云
 まんバ老免がる、我大
 角三月を過せ世嗣の存
 五は自然足利家の命下
 を建置るは控てハ一
 足利家の居あり我る時
 美士は代て美初より
 横を遣まべり又たと
 へ利は下さるは控て
 ハ各中合せ三三三日
 我ん全くは外は美心
 原郷から席を遣我退
 由良介取信の通り
 はハは美我執事と
 今よまでは竹を



手後返り地かゝる共と種花下奉をみる
 関る共いといし津家懐い立とも主三意
 ぶらじに化ちハ津跡目立上よて又今由良ハ
 原直い如く津一人熱系代として本末を立
 とれを外の若世ハ皆懐援と成まや人とい
 よもあれは郷ぢぢの持てハ伯及よて死損た
 今又生て者家禅門と成へる本末よあは
 冬ぬ何よと帝を寺て清きれ法出一同
 詞を揚へ原氏いれもやされたり清ハ其美
 程は戻ちんと同くたる時ハ大源平朝田政
 中村勘介ホ云たるハ大星氏の清は清
 けら我我又もを思へる清と成る時
 目ざハ故よ愛まらば子梅胸を冷せ清は
 上嗣の勢れも内承ハ清懐を遂は推てハ
 嗣は誰の熱る事ハ首まらば又利家の後下り
 て世よ若て由ハ後仇を報せハ必は嗣の成亡



とも一承ハ形思ハ清ハ上ハ身を
 るとも其志ハ愛まらば只迷ハ奉を果に
 利ありと云々ハ芳田仲ぢぢハ心野ハ十所
 先ハ同一津家再興の両端いより由良ハ承の
 別所ハ主の承ホハ希万の齡よ及び清が
 けの地質成ハ死者の山の一番陰を社ハ教
 れと云々ハ世とく大星を清ハ愛まらば
 々ハ不倫けハ大星ハ懸れハ合て謙余ハ下
 るべと既ハ奉ニツハ引かれハ大星ハ元
 々各の成思ハ左程ハ堅ま奉成ハ必一黨
 して奉を為へハ執れとも嗣の浮沈もんぢぢハ
 有へるハ清ハ流ハ格と割るよと法士
 清ハ任後ハまハ又謙余ハ勇士を許むべと
 芳田作ぢぢハ近松文六ハ性名を愛ハ謙余
 下り利善を解ハ由良ハ介下ハ承るよ
 故人各名を愛ハ謙余ハ下りたる

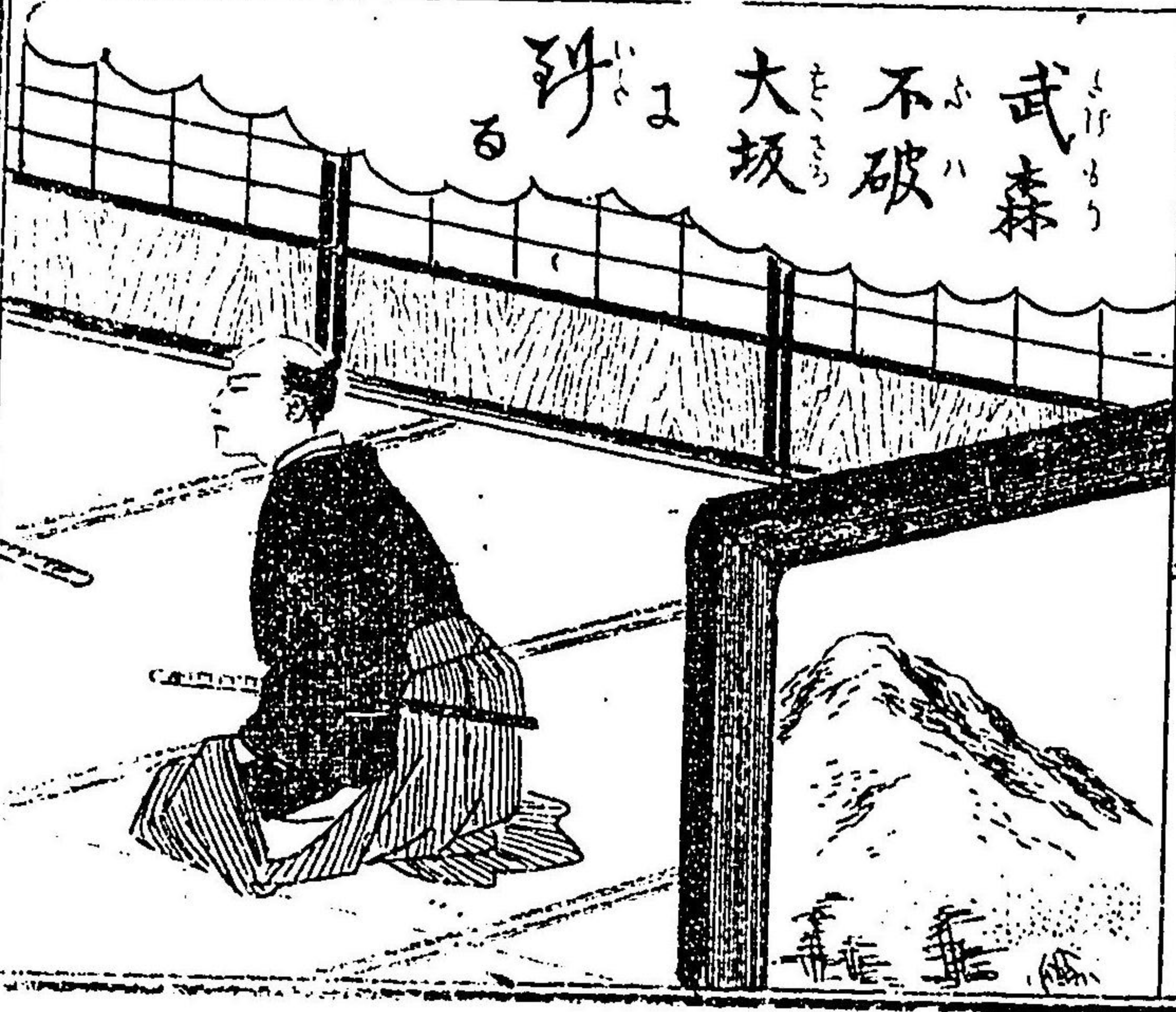


諸士科大星論
 大星論
 論

備前忠臣傳

芳田近松到鎌倉

去程は芳田仲や近松又六八大星が命を
 交各名を交て二月廿日京府を方々三
 月五日鎌倉へ参り、堀部奥田は合て云々ハ
 式程山科は合さる幸、既五回由良介が
 延引の湯を程、己引登るべきを云暮り
 九れども由良助格と洗破せしは依て後三
 回足道足合せを耐はして若返元合人迷
 ぶ掛下と堅き誓を以てえやうり我も
 願を掲て湯ぎと程も流石大星のやされ
 不成ハも抱ましく上方一討せむ越き委く速け
 れハ堀部奥田ハ延引の幸、仗うら思入とも
 元美の上ハ思美を以て評き入まよあ、
 以上ハも抱ましく只時希を合へると同、
 竹藪不破到大坂
 杉とハも、竹藪在八不破敵なるハ三月



明日大坂へ参り、原郷をら、病下は来り、鎌
 倉の分難を委く、堀部奥田が云々、越
 きと速に九八原郷をら、大星は收めて、上
 方の振子を、去月山科は合して既三
 ツ、今んと、清、大星招くと者、れ、
 のぞ、用まで、芳田近松、性名を、先月、鎌倉
 下向せる、越き、浮り、九八、竹藪、不破、を、
 大星は、快、く、思、い、と、い、士、下、り、て、い、ら、な、ど、
 静、と、堀、部、奥、田、必、ず、青、く、い、は、美、必、ず、元、美、
 ニ、は、別、と、幸、後、は、成、ぐ、い、は、大、は、悔、ん、で、入、
 九八、原、郷、を、ら、京、畿、一、重、幸、延、引、の、元、美、を、
 送、と、程、来、り、り、さ、よ、い、う、て、漆、を、上、竹、藪、
 は、合、て、鎌、倉、の、有、様、を、受、て、美、氣、を、入、思、
 ふ、は、思、さ、る、不、佐、頭、手、茂、七、原、が、宅、に、来、り、も、
 も、何、は、法、に、さ、り、し、は、意、を、立、替、を、代、人、を、
 竊、は、法、に、さ、り、し、竹、藪、ハ、赤、尾、は、下、り、程、か、



三ノ五

其示を以て上方を恒に法同士の勸めを
行はせしむるにけり

坂部原の勸義

去後坂部原の夫去清八郎其柱に其勇傑と
して肝膽を推くと往上方の丁若事のびく
の海をんを情をて光陰を送る内渡世を
も言に故多の金を費して常は欲の何ある
何いらうの配當金もそなるがを賞は杖堂
十五治といふ者あり伯父我原平助が不意
思んで大星は手し忠義を励むる元未杖
野ハ豪家より子餘の金を輝へたるより
永堂の貧窮を以て大いし款き金をあしても
を救いしことも又は金もそ果たれん士ホん
を救きすは沫を塗り炭を吞たる例もあれ
何卒秋客をさほで度零さん先は本を遂
ばやと目し救く急なる坂部原安去清はさうね

諸士圓山會

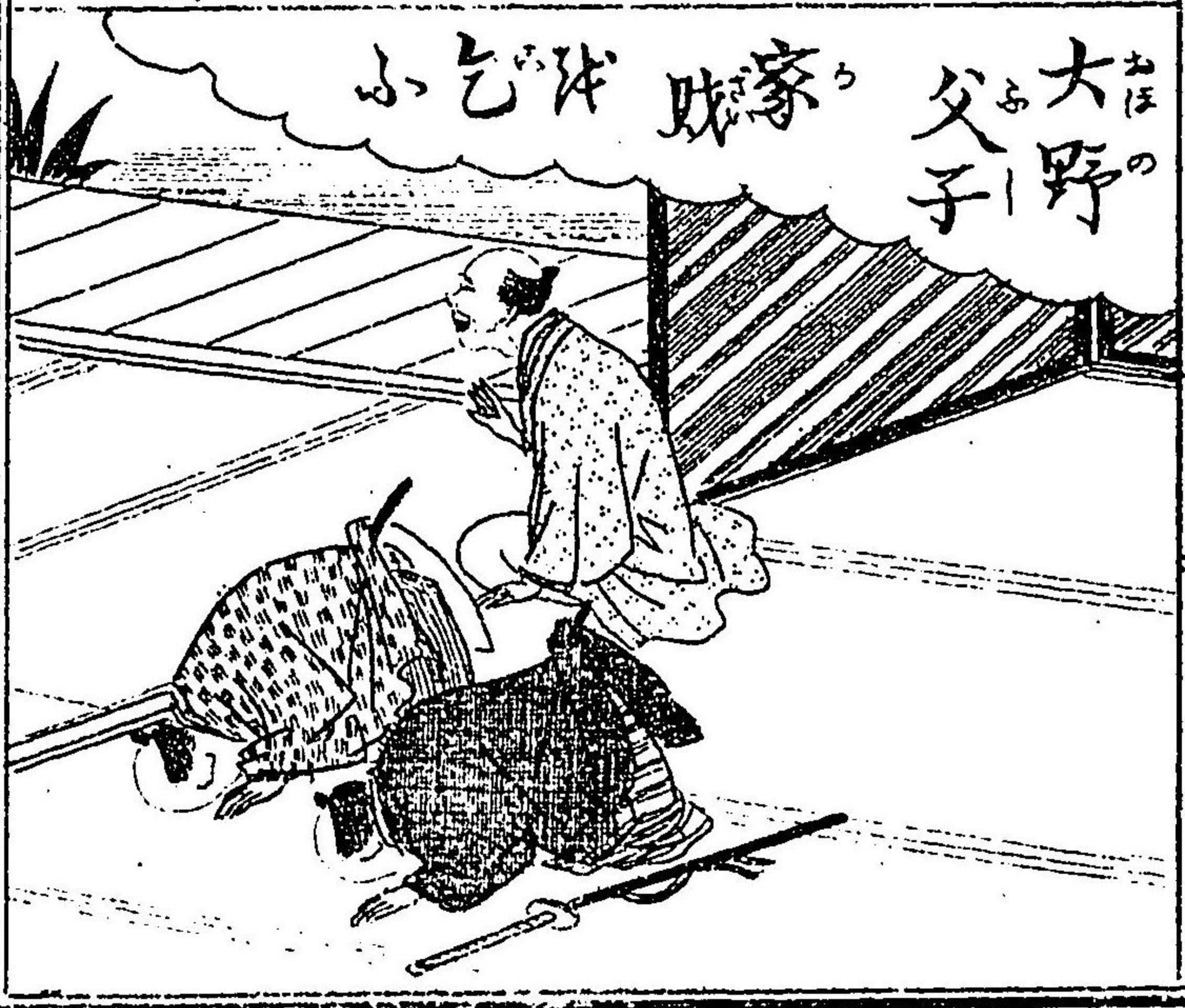


芳田近松をもち六月十六日鎌倉を去り
却るる大星の夫を以て其勇傑といふ
大坂原が宅に至り田良助と引越れ片時
も早く師直を討入事を勸む原郷を元
本尾は組しめて作義者多八不破故を
法一京大坂の同しをうとらう折るんは
一奉を果さべいと會候一夾し既し時
定ぬ安去清ハ鎌倉はゆるんとする時
廿五日美田より飛脚いり扇若他家に
迂り君家の跡目支能いしをうつけられ
坂部原を以て多弁て然佛今とそ大星
の思ひ残せるものありは上六一夜由良
まっげ法同士の元美を次をべと思ひ
そ日直は山科いりて由良介はほけ
田の書状をんせ速は飛脚を山科よこ
京伏見大坂赤尾のるま信へ同月廿八日京



ちへ下るべし各先達て鎌倉より必に
 敵の動靜をききて手をおさるべし
 由良介を以て腰拔とせし我を離れ
 拵たるも半歩もあつてん假令或入信
 夫と成り承く不美の名を得るとも亡者の
 悪名を割る事ありは獨り自己の名より
 うるべしは朝の安否の場を以て決ま
 隠れたる者も半歩を以て彼を殺し今
 日近延判せり今やたはの美をまき秋至
 札りと勇気何日は留りて見へる座中
 の同士大は必び益を勤て暮さばし小野の
 手紙を打て武士の交り乾く育中の酒意
 んらよと可笑満へ原郷をへる扇を揚て
 つと起年来の本望を達せんとお前も
 涙は勇と一くおへたる

寺居去庭望東行



され八割の方世をわけて假し忠義を入たる
 去先は大星が世を返して一なる時大方
 退きなりと結核も嗣の浮沈見えんは
 子一居る去はは度の花柳を思ふは
 度して丸山の會合は方ば不長の名を
 多かりたる大星由良介は越えと
 偽て山科の家居を八幡の借は手へ農
 民は八丈とのりこをきし八月朔日山
 科を去りて京師四條通梅屋敷を
 借りて暫くは下り高居たる折ら着
 屋敷と云へる呉服商人大星へ親しく
 入りたるを密に拓きは去る命にて
 父子及び同士の終末を扱へたる
 居云と云醫師あり元來京師の人ま
 り元徳十三年故て植谷は仕へ
 醫師と成て鎌倉は五郎が年植谷の



凶悪は依て元とせよ赤尾に至り又退いて京師へ歸りしが中へ盲家成瀬の目利は委一にバ美士の家成ホトク委庭は命にて賣りぬる熱して大星の人を用る事器の傳ませ一風化あり去庭元米美房の若なりしバ諸士とせま舎美はいで鎌倉より山科へ移るを先傳我ハ赤尾をお法不さしお使は美は進びたるは度大星鎌倉は下るよ乃んで使随ひてれを由良介も梅茂居下て之を斗りたれども大は刺して云々今今度我們復讐の意を懐き事赤尾美代の武士よりともほかんはあはざるはうて之をかへぞお云ハバ美を不臣は準ざるよ似れま全く左はあちば赤尾の家中人は美く新美の醫師述を澤しひ主人の款を討つりと



云れんはハ蘇亡君の恥するべ君はの美兵たる事すましと 経仕入る日あさくそのう醫師ハ旅の為は刺るも美今今鎌倉へ下られま必人怪んは美は控てハ一両思ひ止まりぬハ一と云々ハバ寺居夜を流し美一日の思は美が百年の命を捨てる我軍生苦勞の職はあはれ世に一君の味を食するは移れまし君を以て何ぞ新古を清せんや美とは冬月は向いての旅は登風邪の患はま事軽ハバ各ハ武術を以て美の徳を討つまハ美を以て美士の病賊を退くハ一とて中へある体は美ハ大星も志をさうんど定見ひぬは美子息去達を以て道中の同道を下先美いぬも美元鎌倉は下向あはハ人事を怒ると云々もぞ美も今面目は美



とれは若んまを遣を旅行は後めんと約を
近着小山留大星

まは近着源四郎小山留五右衛門八赤尾定城
の初一番は進一がいう成んや若来らん丸
山の舎も方今度大星が鎌倉下向を
トて云ける八時未至らば所の二時せよと
以て勢ひ猪大の笠花も借入らざる事か
客易本末を遂んや邪ん成事を仕方
物笑ひと成八天の恥をまね不忠の志を
らん後方も涙を短とせめて後鎌倉下向
をへと云を巧よとめければ大星頭を振
我今日近鎌倉下向短利せし八兩のあ
否をん呆んとの意かり似今嗣は若の跡目
を立下さんらうとも我ハ主をさあうかて
死んば五へうらに見去年伯忍をさる目ん
は世にい越なり嗣の出世ありてき尾十

原 郎 老 母 言



か成上承死をぬすむん又まはま王命を
して株を渡一人のそりを得る八天の恥を
まがんと思ふんあれはすう今既は筆を汁秋
いんりそ上我涙をちて款を解しめら
必き師志が首をさるべし又首を得て
死天下の人口は笑るせは主をさるは
更は恨むべし上法同士と日限を定たハ
そハ一日も延引さうがとせやく旅の用意を
とせければ古士もをさるハ大星が思慮浅
く必に事と仕積むべし上ハせひもるハ
とて終は交りき控約をさるよまるん
とも近着小山八赤尾を由然あれハ彼ホと
れ事を果さん事大星大は快とせじ木と
潮田政しをを使として今度の下向ハも
きりの別をまらハ入残念は存はる各一同
後下りハバヤと進めんれせ進着小山八赤



もゝぬ気色もて鎌倉の奴原浪人の安普
は青丸に餓死せんよりハと思ひきて惘然と
知りぬに傍々くも彼ホは子せられて血氣の
勇を以て事を遂ん事見ても亦たしく我ホ
ハ所をて下向す下と善へんハ今公方と
修引懸れ交りこそ絶えたる

大野父子と家財

妻は初も速かき大野九太夫伴定九郎
か目より成りたるが大星が怯弱師直方
一と具はつへ今八用なるがと成じの夫ども
逃く鎌倉は後り上ハ妻も用直とて様と
又漂泊の才と成り今ハ一統のあこいまた九
耻を捨て赤尾の町人木俣屋善長といへる
お人京師は様なるは使り大星は告ておの
家財をも求む由良介とて大野死をすて
首を下げては幸なるは心も命もはな

去されバ浦すまは返り保さすハ彼が
罪ハ憎しと軽流石亡天の家老磯と食を
戒て人は懐指させんハ天の死なるべし
申さ長ちるは首へ赤尾の町人近江屋材木
屋の主人ハ大星が家財を渡さへき書付を
おまよまきハむ善長ももさ大星は告けれハ
大野父子大は悦び日を定てもを待不ハ
由良介より小野十内津田政久丞
を使として寺岡平右衛門は沈文を拵せ木
俣屋をさへる小野ハ家財金銀を渡
へき刺着さへ糸まく思ひ頂戴せられ
き上まで燈有旨父子の一札をて此るべし
不先夫の手跡手は觸るも様ハこれ
大星飯は泊りての布かきと白服付て去け
九父子大まは恐れ事な付て震ひま
ちよ一札を認めおしけれ三人もを交えてぞ



軽女
琴
琴
大星
名
名
名
惜



傳りたる大野家老職は居たりし時八寺岡
とき八馬おのちりりし面を伝き起るりし
いざしし道は遠く寺岡にありて伏せ
なき湯まじき事ともなり

天川屋侯志潮翁と鎌倉に送る
爰は天川屋侯志清ハ赤尾凶夷の勅彼の地
下り金石の志をあらわしれバ大星も彼が志
始所をせざるをわづらひて其士を殺し
ざる先は獨り町人より侯志清をばげて
去置を命じりる侯志清も皆て大坂に還り
しが家内の目を見れば屋敷の注文と傳り
後知りて相たる鎌倉は其の子幸万昔溜ん
まく既に出來の平八屋風琴を杯に入て
目立ぬ栢は元芳大才も老未せりハ萬に
鎌倉太田六郎を方へ向て下りたる爰は神
成丸作賀と云る刀形治は千名中へも老

侯志清彼方に至て一ツの平を傳り傳り
く昔一が借思は我々の細工をせよ
いまど形も平をわづらひ左栢の平を皆て鎌倉
程まや乃んと大まなれ其を足利公へは皆ぞ
許へり

大星方称到鎌倉
鎌倉の諸士ホる老を以て秋の勅許を相い
飛仰を邦を居て侯志清は傳りて大星が下向
を急ぎたるハ力称父は向ひて中栢鎌倉の
同士百廿余里を往て候もあるも理りかりは
度下栢てハ往彼と云ふより系は老功の人を
一も入れ鎌倉に下りしハハ味人許り方
の要用を果されちり下向をハ味人許り方
老多くとも必死の志三千人斗も入へんハ本
を透られん事疑ひをへりては澤仕老の
わく一十冷い気五よ大星大は悦び



小平太
鎌倉
逐電



元赤尾中にて候に平美舟よりとも原
 の人にお達至て其事及れしに春道待せ
 めいべーやうて津道ひよ来ると事もまたよ
 云とれバ押て移りま振もまき手保はせ止ま
 きりて郷ぢりい望未州大坂を山科へ
 至ると河内街道をさしりりはしく思ふ
 括勿体なくも母を傷りきりてとまひる事
 も又孝の道もあはれ我死後まけりてあふ
 抱きしめしるるに色も懐きし事よと清根とあ
 ろん不捨美を以て長引の病を告んと道
 りたて道一宿亦は留り母に向ひて言ひけ
 るハ昨夜法柱量のめく同士の舞をいひて
 ろを一大刀恨んとは存謙金へ下りし事
 幸あはれや上ふ法教をを授けりてこと
 必定まれば一日もおそくもせせまふこと
 昨夜近色と願ひにいひしがはかみを授けりて



大高
 天田宗彦
 門人と
 我
 師直が
 在宅
 知る

志を消滅しを修りしも孝及よあはれと
 存相とを道よりえてぬ一美事を告て津
 波中上にて中丸バ老母ル克と打突ひ夫
 又あ母がさ美はお遠まきバキきこと
 は上やあらん必じ我在と思はに本を道
 下とまきあが云とれ元辰今人母と大は
 子あハ永若はさる月且まより老母の起
 ぬを怪し深不を見れんともさ通一血
 成りて伏番しう元辰大まは敷も枕尤の道
 事とるるは我存命の内ハ母人を引され又
 も自れとがまきるべ一法も人強うまき振よ自
 害と逃平ぬ天の筆母の筆と見ひきりてま
 手柄さバ一とまきへとまたりハ王親が賢
 直の母と云とも母はいりて傍るべきは病ぢり
 ハ悲歎の候しこれたるが涙し涙を押しそれ
 よう跡の筆法事とる宗三郎は流しそすハ



赤山科より良雄は老母が自害を告
鎌倉より下りける

軽女彈琴告職

大星由良し介良雄造次郎肝膽を砕き
猪忠を孝ト云れ天地神明感動しなま
そ業修し成つて京師及び法とよほそま
る士残るに鎌倉に越せければ由良し介を
京都の用事を細ひきり鎌倉より下りて
きて余波を情と傳ふ二條寺町の二文を
が許し大星が東行を花羽織を巡り
まると軽女ハ打たれ焼火焼く一ハ
敵行廣氏ハ後と口をささたれ大星は
めりる目方度首途は敵行の後とハ思ひ
よじや考く多難し油を以て鎌倉下向を
祝き下りと云れハ軽女ハ琴を引よせ七人の
尻尻もおどろいふとて越つてと留め



松村半太夫
刀の
研丸
試

九春は秋朝を會て辨れ大星心は
食むはまをむをさける月九十月七日の
黎明三條の夜籠をより旅行を勤むお後
ふ人より湖田政一並近松文六味村三郎
左の美堂は八洲尾孫左の室井佐六を具
しきくは鎌倉に入ん事を恐れありとて
遠處祐やんが養て買取る平戸村へ去る
程を後て鎌倉をさへりける

不美士美大山田盗金

あやふきと儲とて命をたど死を偷て我
はき思ふも國家の支城にして倉庫にも
如き夫之妻は片田軍兵衛ハ赤尾山雲の
希ハ堀部と俱日本國より人々の法弱とい
うり荒さを吐き花下りて遊版せんと云る
を近處扶くは春の大星が本心を以て鎌
倉より下り京畿の法士が京行のおそきを信



俺はは初め成りて美心忍ぶどろけ大星が
 鎌倉よも美心忍ぶどろけ大星が
 んぞ又も利小平太八鎌倉よも美心忍ぶどろけ大星が
 土前原林今と同宿さきして筆さ何い
 山田が筆さきさきしをさきし腹痛のん者来
 比徒さ退れんとまれども美心忍ぶどろけ大星が
 まれ本馬場退り事あるは月日を送る
 内又村入の時日近きよ有べき振子さバ
 今ハ格くく宿さきさきして上方さておら
 んと道さきさきしが遠敷林の用事有て
 平乃村さき大星が旅宿へする道まで
 遠敷も利太きまれ本馬場ありて身を強
 一祐若んが引退を待足さきさきして美心忍ぶどろけ大星が
 汰ちんも小平太は結似らうと思へども黄
 昏のひまさと彼成ハ初さきさきして美心忍ぶどろけ大星が
 やと思ひ引退ぬち大星が旅宿へする道まで



明朝に至り前原林助より小平太が遂
 電の旨告あるも祐若んも初て叱咤
 一男ハ小平太遠ハ上方へ立退り物ま
 ちん今日に至り命を惜む不忠者とい
 へん美心忍ぶどろけ大星が
 んと刀さつ六既ハ折立ん色さバ解大
 清の毛を押さるやいさる信を力織
 一何せん打持て空れよと格と若け
 九秋ちんも剛と止りぬ美心忍ぶどろけ大星が
 きハ大山田莊ちんが引跡なり彼もさきハ
 美を選りして今日退付旅宿へする道まで
 入のおよぶりて大星法士ホが家賃難
 を僕んも配金共さき大山田法士
 へ可お宿旨を命じれば大山田も
 交えて立ちんとせ一折大星大山田を
 び止めさ元のと今サ一長いして座



為の内働らき不弁なりとて一腰を打ち
見八賞への切物なり其元よるべきの
る存分の働らき有べしと濟一丸六大山
田取て押裁付入の時比刀を以て思小
係は御まらんと御まきとてさるそ日暮か
お原が方に至り由良介を中付まで各家
必の構ひより一赤金子五七百不足之
とて前原まで金子を五る備りいづくとも
さく海夫お由良介八座をわらぬりき待
とも者候さくそ内法士より入用金をま
いそくさるよおよび相八座をわらぬりき
金をたてて欠乏海とと初て見を知らる

武士知師直在宅

去程より野氏師直剛平の後ハを尾よ
隠居作付られ赤屋を居させといへとも
赤尾の浪人ホが窺はん事を怒き一門の法



諸士
泉成
於下
取
評
定

候方へ十日或ハ廿日滞り一ヶ月は三杯の
座敷を徑廻りたるを体女の寄物よりの
又ハ家は似せて登坂何時ともまよく
まがされハ舟中の老よりともいつ宅成
と云事を知りせざりし故山岡が後家も例は
まれにも不念まが行はば依て今日こそま衣
と定一事をまき旨を悉く子婿へ通下たる
五郎見を安てより常一師直が去行を疑
々る或日裏門より女中赤物をりきおけ信
一人中なる小末斗ぞ付居たり子婿見を
又付まハや見をまんと又ハ隠れは付行木
とま三丁斗りも過内左右の小海より信三
人或ハ四人ふたりも来りて左は植木太
は付候は大勢烈をまて押行或ハ侯の内
内へ昇入りし五郎八門の撥の方よきて又
入とれ彼乗物の内より六十餘りの有髪



の老人白き衣服にて之をるとんて而直
 かりおのびとくすのり不たは汁入とも終身
 中よあふされん念の幸之何卒立巻の目ま
 取と父をさんと平しは征赤尾の浪人
 怯弱して是も是も是も言京都のる者
 追と謙念はゆりか師直も安堵の思ひを
 さし良用心も怠り徒然の戯は茶事を禁
 と千道は堪へる醫師沙門或ハ者人よても
 千術は道一たる未を敷促て閑居の持巻を
 暗し天田宗彦と云る茶人師直がんま十
 ひ常は彼弟も若入に山岡が妻之を大屋が
 告る大屋とれと大高源吾ハ茶事まんへ
 去まれば漆を合ぬ源吾ハ兵服屋新巻と
 度名一手便を求めて天田が門人ときさ
 む大屋ハ茶湯誓古と称し宗彦が宅ま
 入て敷田者ゆを送り文を汁は折し編てハ

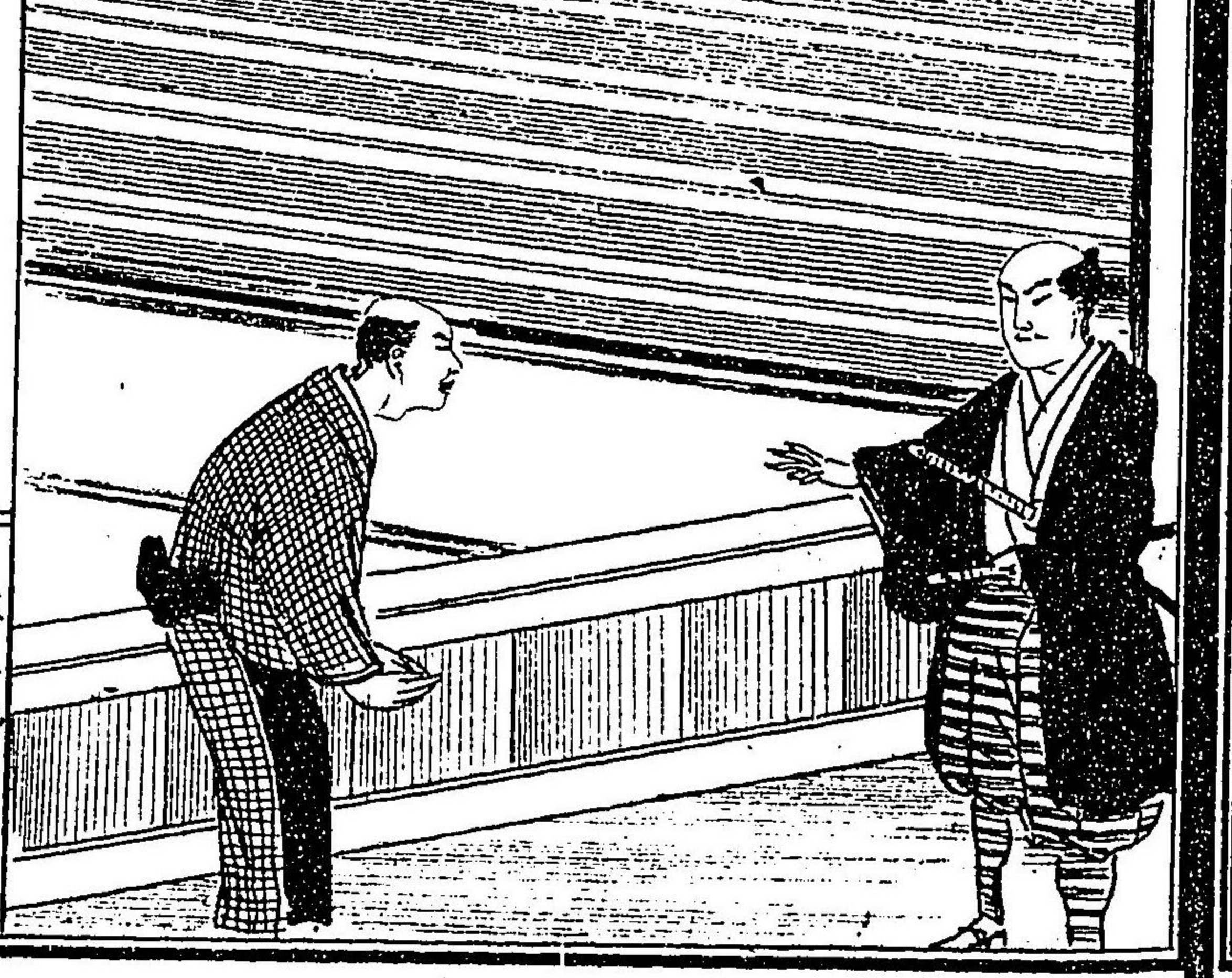
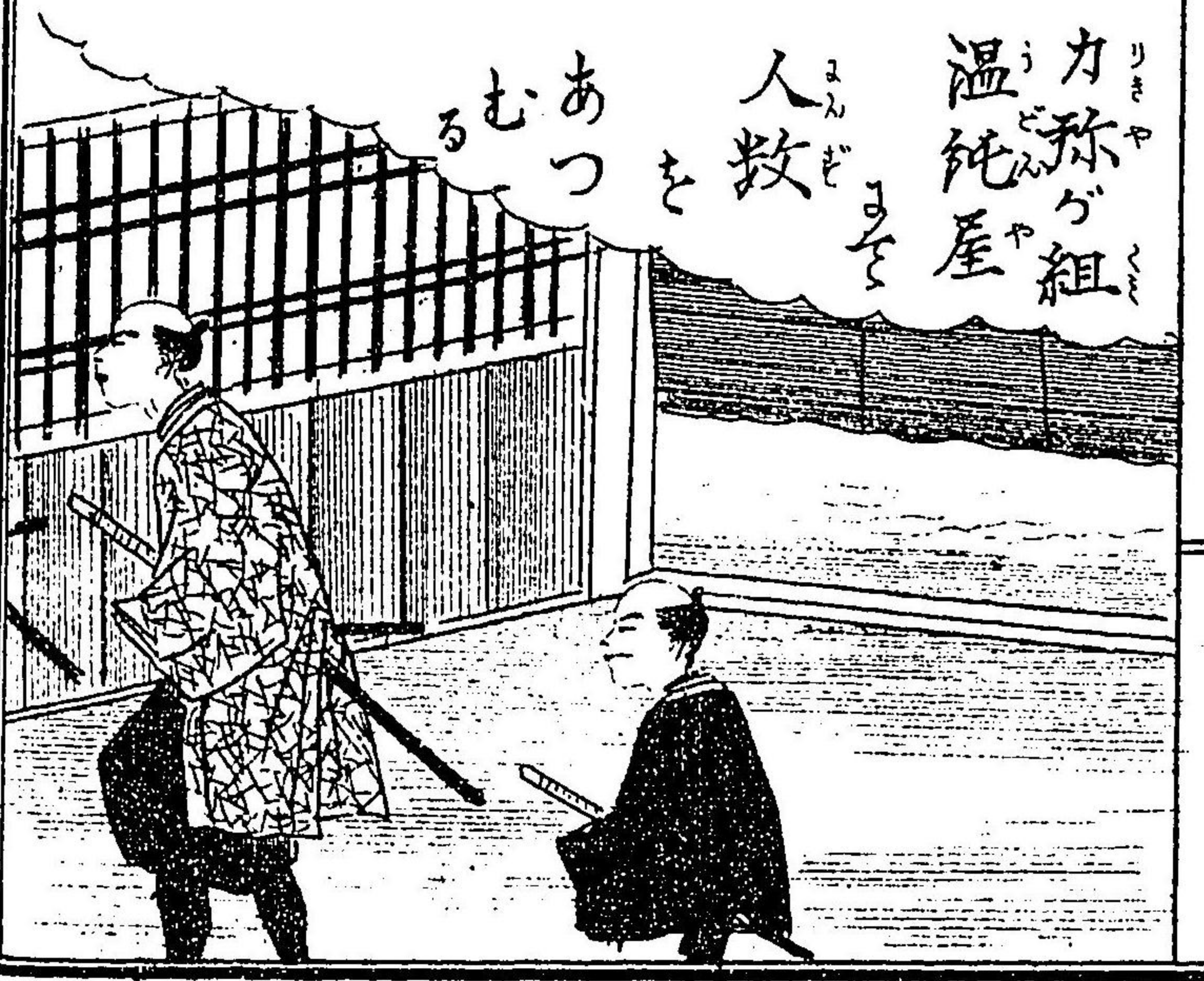
師直が物敷書を尋向ハ宅中の廢る換を
 向ハ良雄は浮りて繪圖と引合して汁入派
 任人故死りの要を汁り天田は狂も若入て
 師直が弟へ入ちんと振とんてとんてとんて
 美士が精忠天地も威意あたるまやは征師直
 が別業は別宅を造り年の内は後徒有べき
 とて十二月十四日の表名残の茶会を催さんと
 千用をささむる由進く山岡が内通をうけ
 れハ大屋大まきは悦び馬天の導ぬる下大ま
 り漆を合ぬ狂も千治道をたさんと大まき
 らは宗彦が方よ直りて云なるハ尚十四日ハ
 秋指去宅は控て茶湯催しなる貴老何
 卒法入来は控てハ赤るるべきと云ハ天田
 之て夫ハ近ハ残念の事さうそ日ハ師直の
 の茶会よりし控未も彼弟中へ越えんとてハ
 九ハ大まき大まき踏念の体よもてさハ有ハ



由良 組 宅 集

松本茶會日限延引可仕と本を
 まき示さちて立大屋は告孫十四日在
 宅はつゝたれ由良く介大まは悦い
 連者をも以て法ま觸平石村遠哉が
 宅は集めて去るバ師直近の別業は接
 るは付尚十四日各殊の茶湯あるよしを
 吹上其の翌日と云き以て昔月付入能
 べし各未だすう数月代をその法所
 素前有り彼方まで号令ホカ後まべし
 夫道は各八田舎へ引えしをありて孫
 さ片付中なるべし但し坂部前原救聖の
 三夜八故の近隣成八を怪は香て付入の
 お各彼方集るべしと法トたれ法まホ
 大まは勇り立勇り立者も信じて入るは
 大屋体をもてうきりうき悦び各形まで
 勇れ十分成上八故は何ぼ人教をもて

信るともやハが付換一ヤベきこと十四日
 在宅有し幸見亡夫の我を導きあふ
 不かり相と去年凶産をゆりしり以米
 食事をせまれども酒下しに枕まされど眠
 るるあつたは涙は今日こそ心も打解る
 やうは森入甘く食事をまべしとてまべし
 養養して各旅宿へ送りたる
 松村三太夫刀の研減
 養は持町とつゝ下し竹屋といる研屋あり
 味村三郎おろと八蓋て懸末の末をりし縁
 を以て松村三太夫刀を彼方は持束りけ
 刀いらまも巻入研めらるべしと教しが十二月
 十二日三太夫と三郎おろの直士律ひて研や
 は束る主者向い津和の研が束せしとて刀
 をぞりたれ三太夫大まは悦ひ束は三四日の
 中し田舎へ引越まされれば津和は刀のとき



納さる田舎の幸成ハ山越など一て救出
 のゆりま猪狼などの狂殺はおまじき
 ものよもあはれ左様の前もむハは刀之
 結研あれバ気きひハなるべし去まがらば
 中程ちと我付ても昔ららハ様一んや
 度といはま主いさまがく人安き事之
 と善へくハ三太夫刀を後序手打はせ
 とと打は大きな角柱二寸斗り切込
 どり作屋をさへ見味村も手を打は三太
 夫が手の内をぞ感へたる三太夫味一だ
 は味までハ鉄才成とも思ひ候は切は
 あんよとて金子五両を主は後行
 屋大まは驚き見ハ以ての赤の大金さる
 研代ハ二両までも餘るべしと彼金をさ
 ぬ一々丸三太夫吹ていやく見ハ赤子志
 まり矢納有べし又前下の名残をんバ



者一種潤へるべしと笑ひまがら云はれバ竹
 屋悦び下筆は料理を拵へおは三太夫
 巻をえて戯れはゆるはぬはぬ迷熟子
 巻かろされとも志一戒バとて料理も十分
 は食して善なるは速物持一近田舎
 へ引移れバ又又候もは来る事有まじ
 折もあはバ面合をさへ打角渡世はされ
 よと候さつげてぞさかたる
 大星防高貞後室
 折て折付の日限定りはれバ美士各法
 反方を焼梓老奴妻子有共ハ名を添
 の形見を送り善状を認めて思ひくは
 長き別を述べたる爰は榎谷判友の後
 室天正善の法ハ縁の髪を拂て強成前
 と号一縁去の方はおハハるが一日由ま介
 准拔嫌何ひの為とて来て中ハは美近

諸士兩國橋
 人救を
 揃る
 図



日本國へ引込りしは丹波國の住居仕に
 へおのの遠客跡をも承り奉成程く
 此の爲何公仕よりせりたれば
 八久奈まといひしとまつりて思ふれ大
 星を清きよき字で對面有り昔今の事せ
 清拍押有てそぬ敷きを清めいふ大星
 も良政を流して退き一次のるは後付属
 の士は向て中なるハ述と紙の如きの相させ
 上ぐのる各封封あり披見の上後室へ
 差上ぬらるべき旨をやてせられたる既
 十五日は至て後筆の沙汰區を成し不入
 寺岡を以て一封をさる各事なきまじたる
 一通の送書及び去年本國駐放の時用
 金別府を介同士の書を送り又ハ東西地
 仰の貴武具の賣買等悉く帳面は記し
 残金ハ京師具服亦より爲替まで後室へ

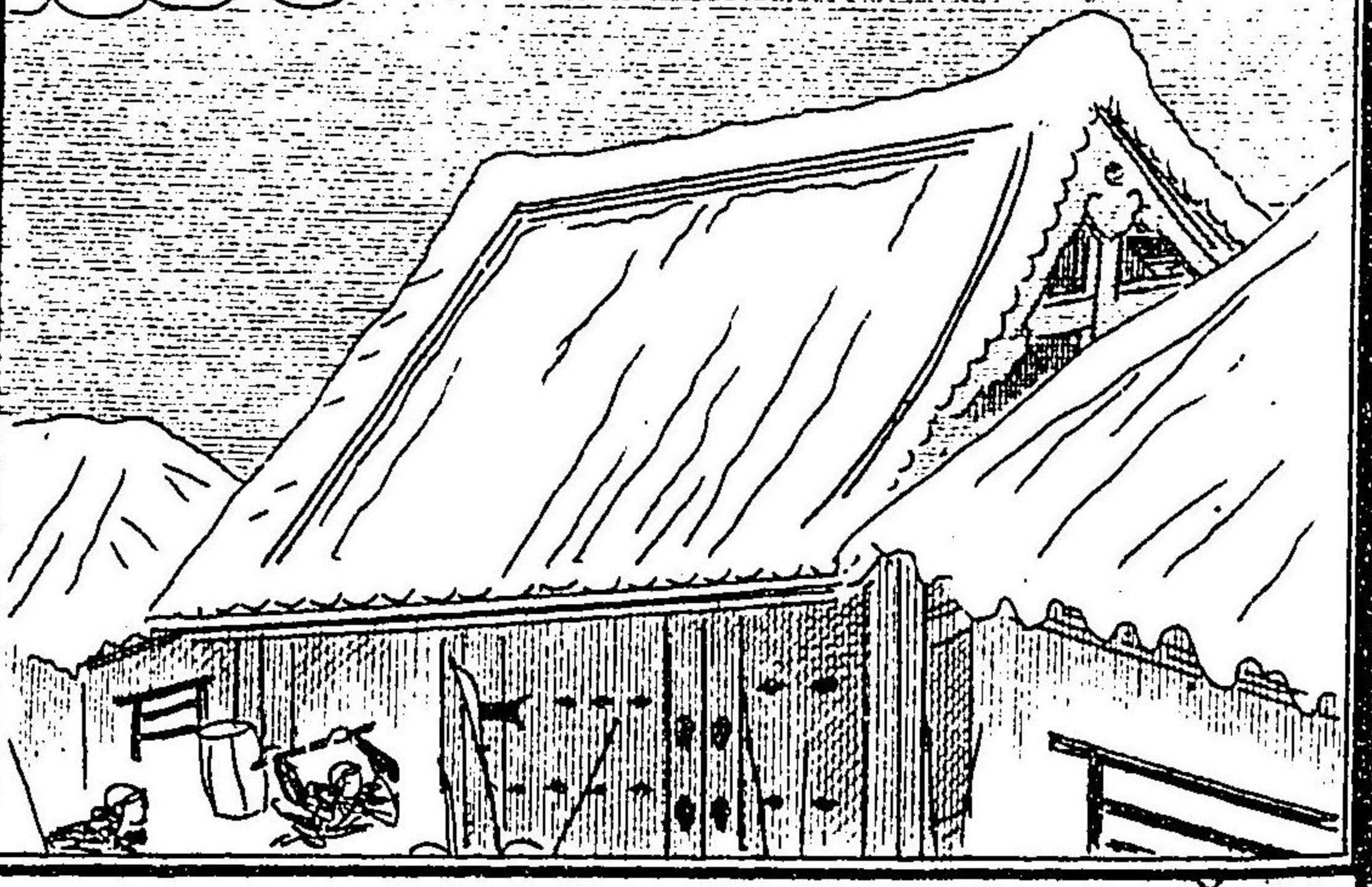


指上り者勢を形を添へ送りしハ
 批附との書を書き打て大星が
 番くする

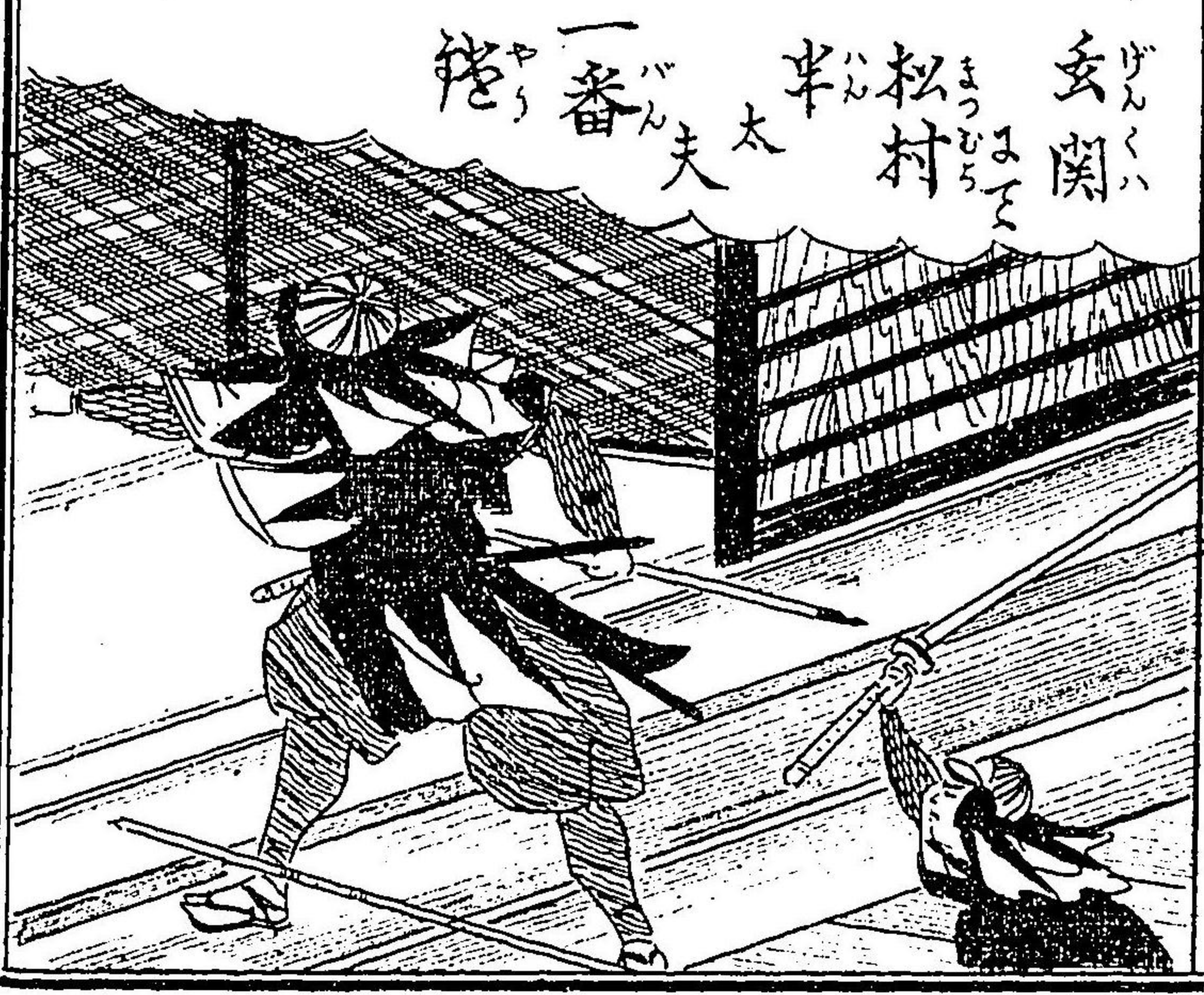
義士打打定

松拍八歳の寒見えれ史は八國の危見え
 移て元徳十五年の冬十二月雪降るる
 一にて十三日は早朝より大雪降り積り
 寒氣凛冽して指を凍じ十四日亡去歳
 忌日成公事今我師直が屋敷は付入へ
 定れば公事の人々も較り泉成する
 一方大入りて大星住持へかたるハ
 地の住居浪人の朝夕はほまへんとい
 國へ越きお道の清世をもはばやと存
 八亡至る日は尚りれ故例せせ中合
 各東西へ分敷共再會計り程く覺
 には依て替の餘はを指なるけ合の

諸士師直が破る

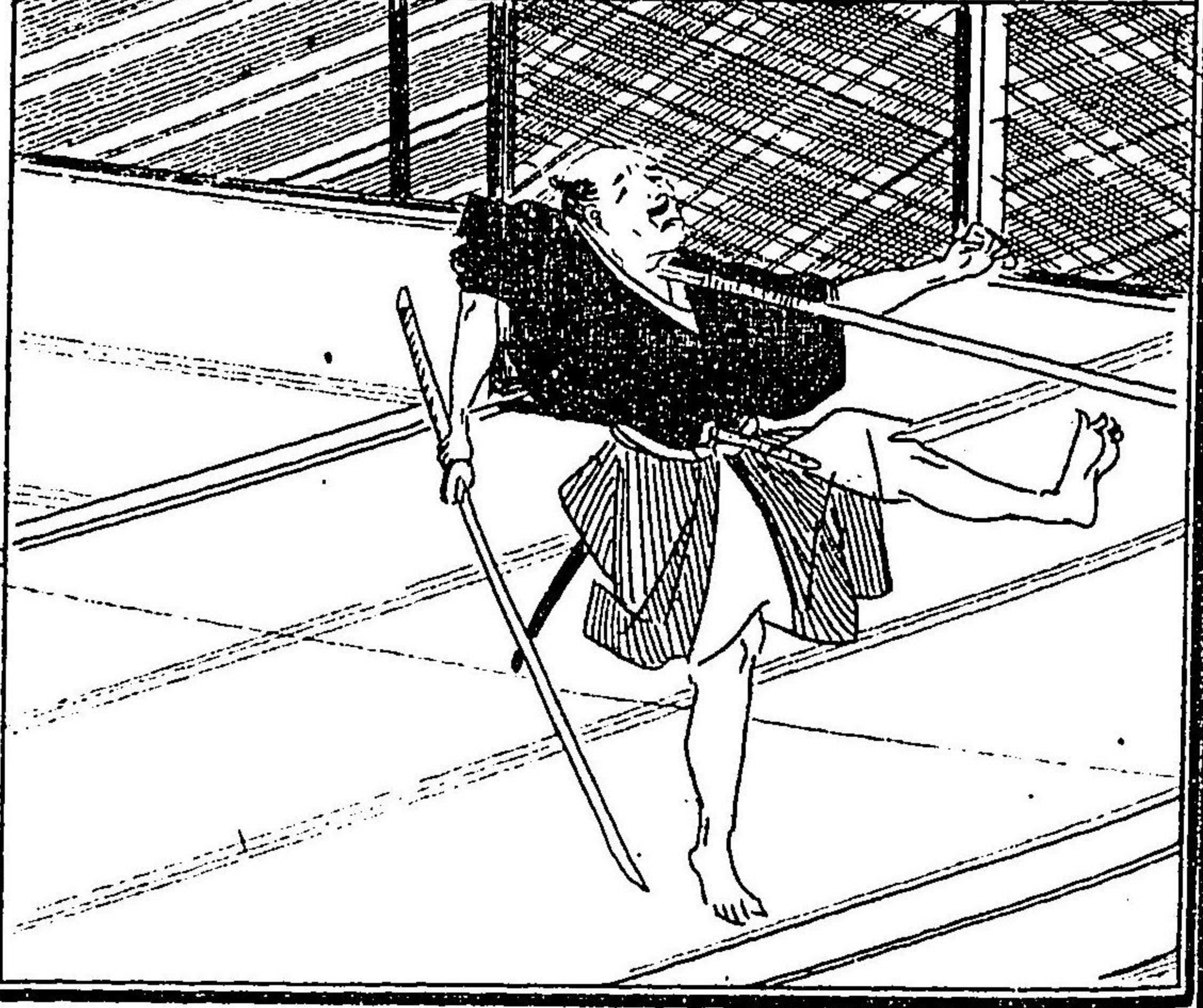


きぬるべりとて白銀三枚をさし方丈の座
 敷は居美び狂ましく外も候けれ茶湯りな
 ばは方よりの中入必に准池もふり流せ用よ
 れ七所刻を移し法流をも遊なれとて
 少障子を隠くさして秋村の浮定をぞまじ
 まる時は大星懐中か師直が屋敷の園
 を方して分理も随て人故を排り隊伍を
 分て備へをまじは四十七士が姓名を札に記
 し今るの指圖は合せをさへめてを尾お救い
 臨機應変の流をぞまじは先東西のあ門
 を遊子搦手と一ツは分て差向べり二十四令
 以て表門東組と我見は向ふべり裏門を西
 組と芳田小助も指圖をばらひひ二十三人向
 へるべりと云々れは芳田小の寺口を樹へ裏門の
 大將ハ流彼とやま及びカ称取軍一らるる
 流が流下おとさへるべりと各一同は中ハ由東



玄関
 松村
 半太夫
 一番
 捲

と介受て未熟の悴中へ打入の指揮思も
 よまじは思も限りて流同ん候し難しと拜
 一たせ各竟るカ称を以て大將と定まれば
 は上カカさ然るは後見とて芳田小助も片
 山橋都さ流るるべりと定まればカ称左な
 向い流も不省の素流下知やせん事思ひ
 も考らざれば伝照止難たれば且流ん全流
 ひすいとも打入の砌ハ方の流下をさハ四
 人の土豆流斗ひ下さるべり素ハ先は進
 んで何とぞお流の手をさへさげやたしと
 一札を大星元は指揮して云云兵共四八
 志は進むで表門を破り師直が居るをん
 然て切入下必進る故を遊ふべり又考
 兵二十三入裏門を攻入敵の勇をとりひ
 き真意の中は在て後流とけり小倉く
 より起合せ流をさへる共と討たるべり女



壺を振りて殺さむらにね二倍へせは各三
 人宛組合て懸れど勝負は臨んで助合外も
 顧る事あるべしにね河天川を以て飲味方
 を小ちねやいははの文字を以て東西よか
 ち壺中は白旗を以て白昼の如くは白して
 勝負をさまむべしむ火の用人等よんを存
 べし合戦の如く飲陳を破るも勝とするは
 大きき速く師直を討たを以て勝とし討入
 八九半時勝負は教明を限るべしとて懐き
 呼子の笛を吹出さし一ツ宛渡り達してもあれ
 師直を討たしむれば管を吹て人教を一不
 り集むべし面と金子三を懐中し討死
 の後死骸の元片付代とさるべしを練ハ
 尾返度と評義の助中合に通る各是茂
 守るべし今表裏の刻を限り堀部杖重
 前原が壺は聚るべし七各心よ叶はざる船乗



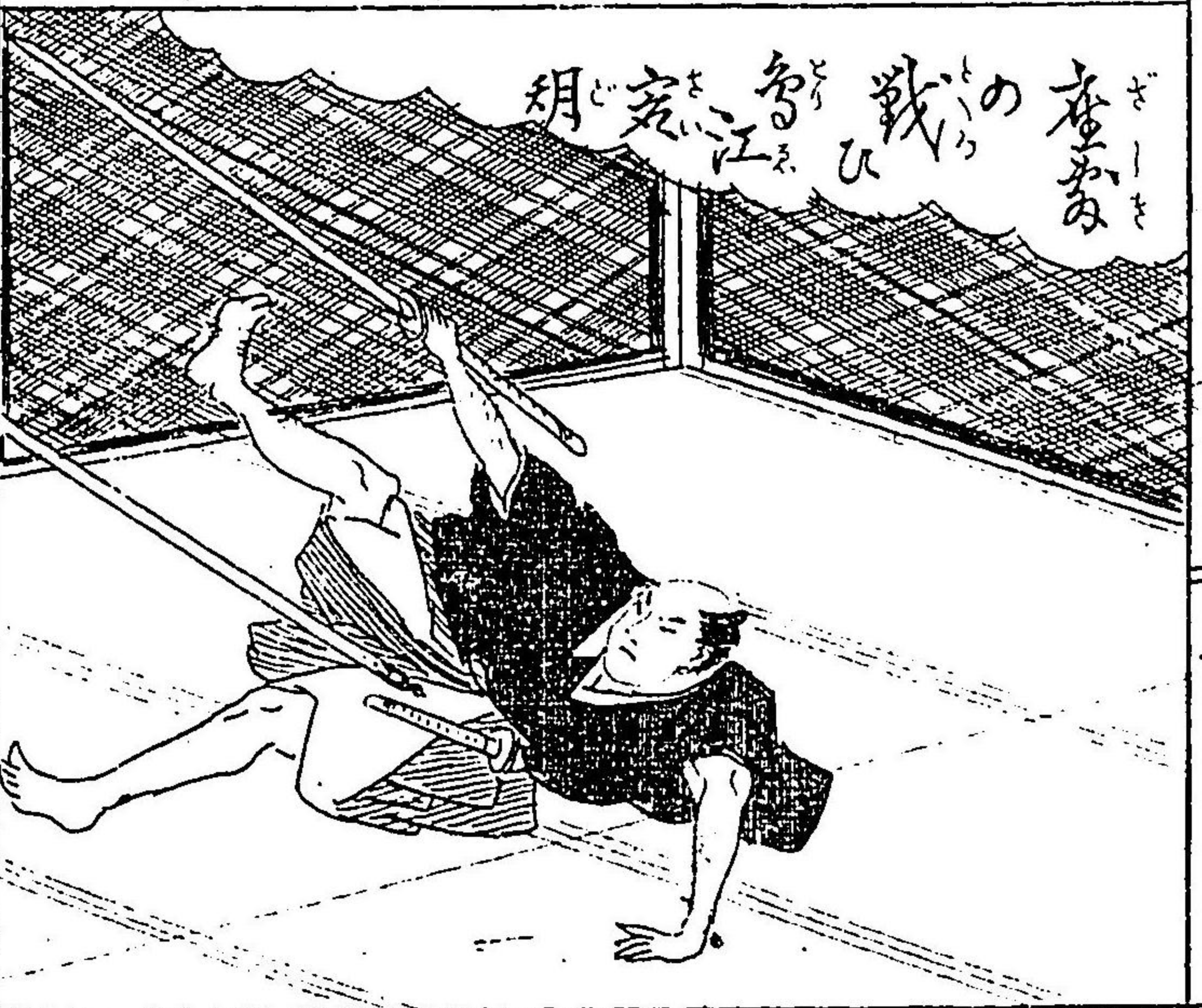
不破
 救右衛門
 手練

腹巻をくはせしむるべしと云はれは法士一同
 河を抜く大星氏の指揮法をきき置き當
 べき法指揮の教畏りしと各泉成寺をい
 で旅宿へ入りしは津とあり有根さ
 度小師直が鐘を入込し山岡光と津が後家ハ
 師直が例ま有て津は採を破りて亡夫の
 義は誓うんと振と心をきいし諸士討入の
 空目きまじりし大星より山岡が後家よま
 く後鐘をききまじりし通はれども彼女討入
 時よ夫の名代女まじりも働きて師直首を
 ばんと殺ししをば後家方ありし大星
 まじりしをばりしをばりしをばりしを
 義士出立三ヶ所



元徳十五年十二月十四日の美昏より坂部
 夫去清家小大星以下二十四人驚き夫の利近
 又集り後家と改められたの酒宴を催しける

坂部金丸が妻ハ女まぐろん剛けて人々の首
 途を祝ひ方陳の礼を用ひ橋栗昆布を兼
 子にて飲の首を元名をどうある根もと業
 もの吸おせんとて鴨を庵丁にて廿四人を
 酒を進む大星を始め各大に悦び伏よく酒
 を過りたる橋部金丸中なるハ我ちハ極老の
 才にて歳暮は痛くつ着るりの心巻ひは死
 者外より一睡して後より者足さべり各よき
 極は酒を過され方發有べりとて素と女手
 足ささいせざるいひきりて塾屋せりハ誅は剛
 勇を双の老人まうりて子の中割いんれハ各
 吹ひりて橋部が宅をさる國橋と集りたる
 温徳屋まで諸士来會
 搦手は値り大星力称が但ハ二ツは別れ秋野
 十平次前原称介が宅へ集りたる爰は浅川
 の辺よりどんや久を清と云る者有矢る形有

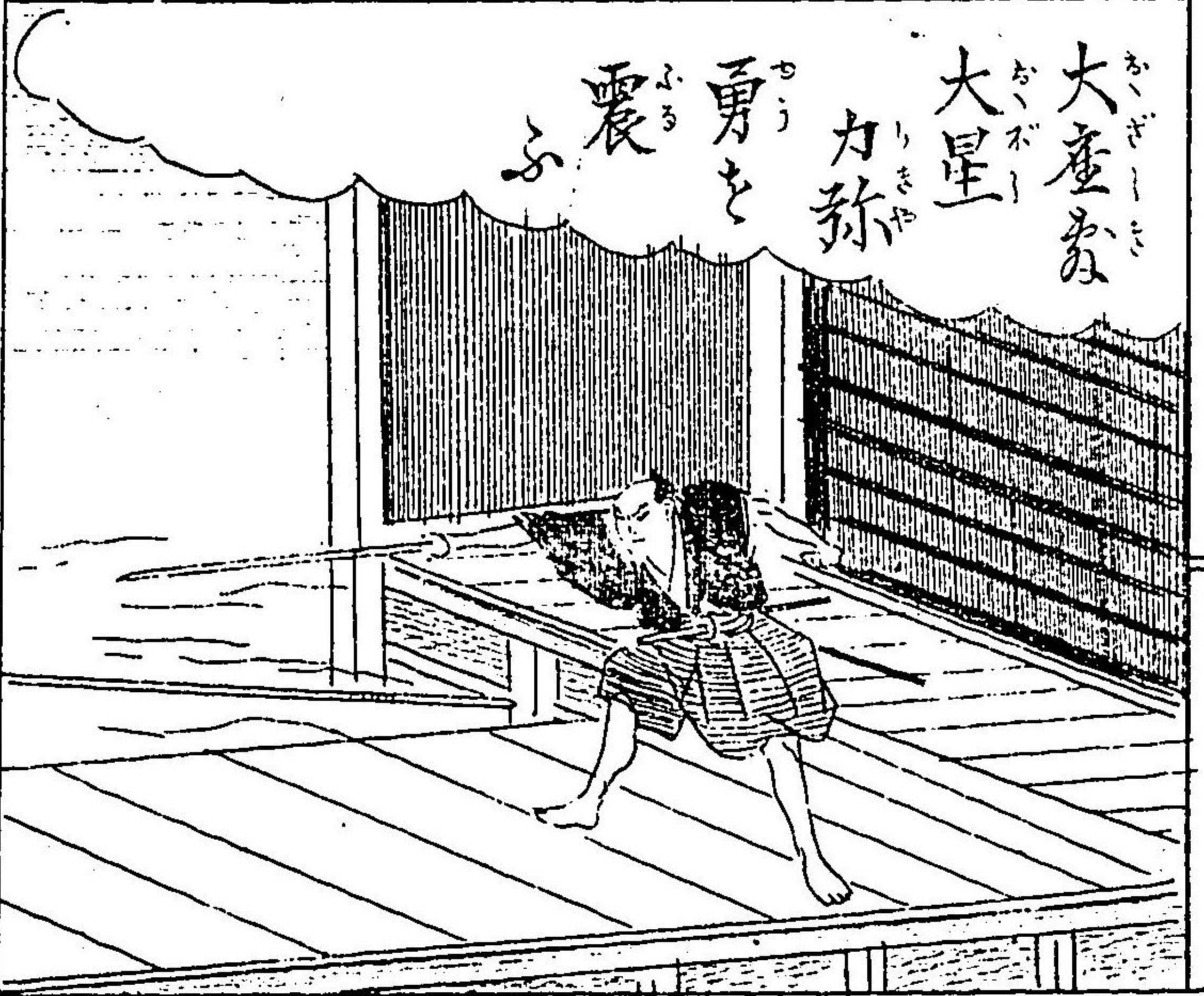


と八年にん安く交りしがそを青重太郎旅装
 束まで大小を摸とへ彼方より来り乗はなだ
 侍業と申し令せ因舎へ引越はし付室中未
 五七里も行くが解は難美せるはゆかり
 見は依て今秋更て者立するよんれハ尚不
 の名跡も今秋居りなり侍業ともとはよまて
 待合せんよく安な中ハ温徳屋人あやう用を
 使はるべりと情中ハ金子三百方一酒着も初
 有下と云れハ久去清毛を有ひて夫ハ名成旅
 立之者買の事されハ何人あ成せ仕るべとて用
 をなはて侍たる力称姐の法士遊々来り各
 温徳屋を食し酒を吞振との戯れを各各久會
 清は吸きつけ秋野前原が宅よりいりて各
 を改めてさるは橋部といそまきなる
 法士兩國橋は勢を揃ふ
 太公望が兵道の術は去勝の術ハ密は飲の

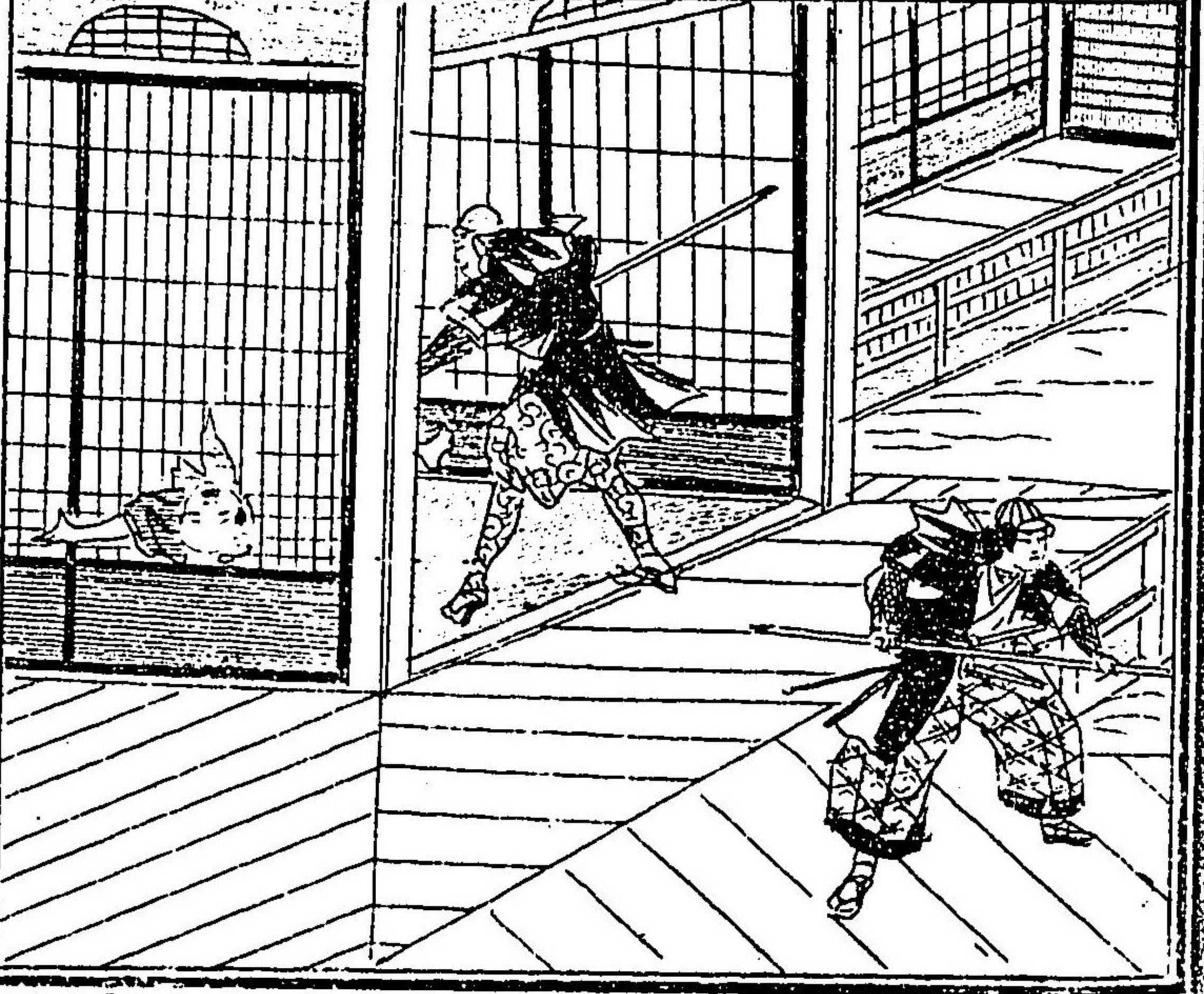


僧本忠臣傳

機を察して遠くを利し乗て疾き不衣
 を撃つといふ時は元徳十五年十二月十四日
 大星を始め四十餘士亡君の仇を報せんと
 肩より肩をとりて子の中判権部前原牧野の
 三家を立ち方國橋を集りたる今款大星
 が殺束より後巻仕立の志込裏小袴黄の
 金襴をもち浮杖の戴付梅色の黒小
 袖袖織八重羅紗を用いてるりと袖を搦ま
 白く大筋にして袴中の裏は兜の袴を包
 火事袴袴末をぞ移りたるす外同士の志込ハ
 袴の布を裏を用ひ大筋と小袖の紅裏袴中
 のおまけハ四十餘人よりして少くも遠く津
 威有て猛くえへりきまは寺岡平をりか
 才同名定ちりハ大星を命を交女をさ
 背より直ぐ門をおを彼方と徘徊しを御
 ぞ相ひたるは叔ハ師直年暮の茶會を催し



既ハ四ツ邊は客各帳をきて立ぬるおの
 餐煮は家中の面ハ大星の御物者いごと
 静り更の利あは成ハ時分ハはと定ちり
 魚きお玉搦は絶ぬるは時は美士の御物者
 洪は物を集めたる定ちり大星のおは進
 者より彼のおを相ひり下末は三更のすり
 退産有師直も玄關迄送られぬ内ハ
 入られぬハおは御物者御物者御物者
 き事もおは御物者御物者御物者
 が芳を謝し御物者御物者御物者
 疾と云ふハ定ちり御物者御物者御物者
 直はなる時は大星法の御物者御物者御物者
 大星由良ハ介原郷なる川津久太夫富義法
 清ハ竹茂喜多八片山源五ハ板部夫夫清松
 村喜平味村三郎ハ夫田五郎ハ藤田其
 奥田孫太夫芳田作ハ岡島八十ハ小所寺



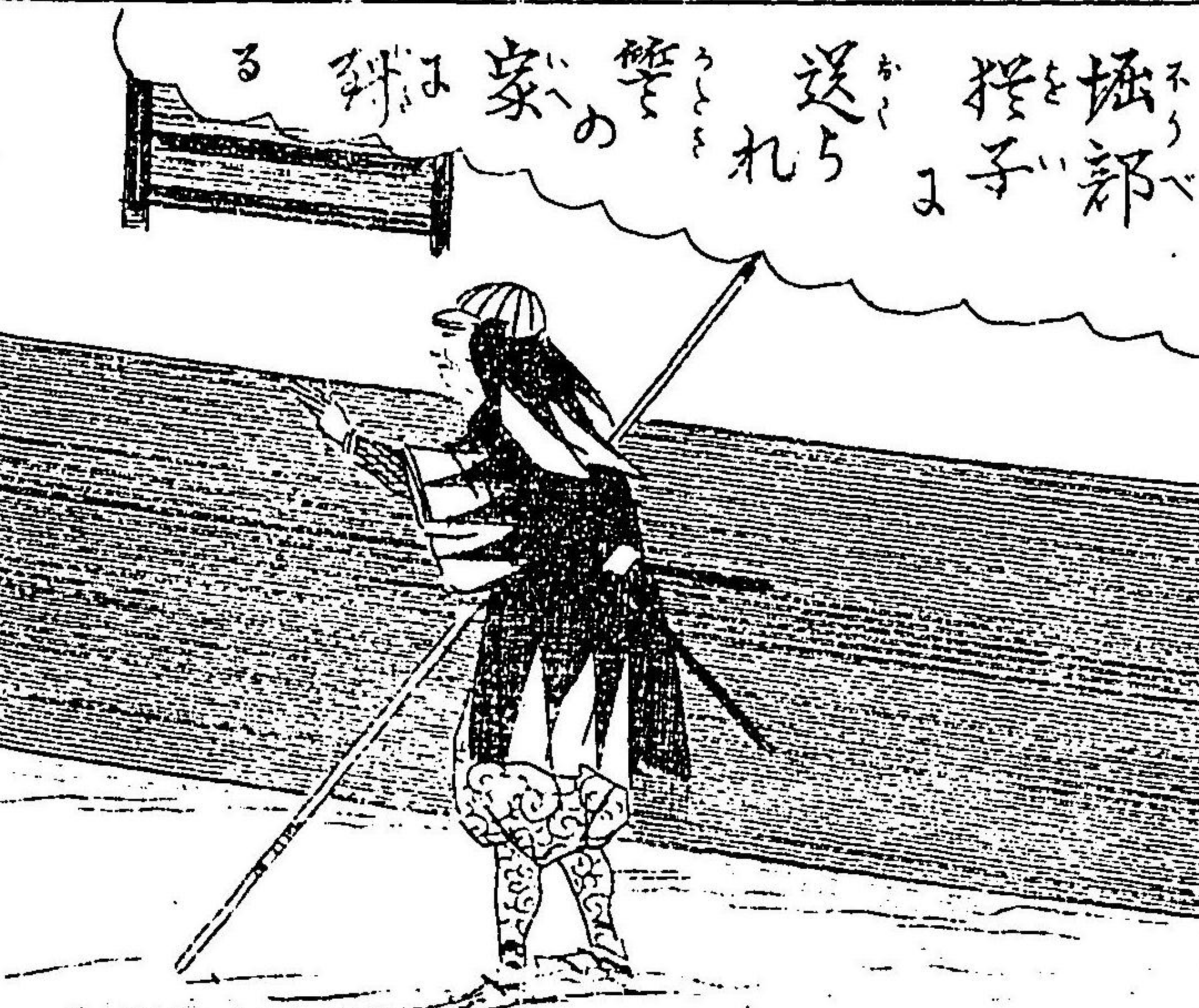
孝を以海賀称を以佐頭子茂と横川勘を清
連見惣を以岡野銀を以于情弥五郎知賀松
勘六大高源吾夫を以重太郎以上二十四人を
遊手と定む大星力称潮田政一丞不破教を以
木村岡を以芳田仲を以小野寺十内を以若菜五
磯合十郎を以堀部安を以清倉傳助若谷
半一丞大星清を以松村三大夫杖野十平治
赤垣源藏前原称助中村勘介奥田貞孝
岡津珠九郎于博三郎を以清早降和助矢
新六寺岡平太人以上二十三人を以擲手と
各威勢を以怒入烈を以一高松灯を以揚げ斧
階子銀矢を以矢擲へ勢ひ山を以劈く如く師直
が屋敷へ急ぎきたり

法士師直が屋敷中へ押入

既に其の刻は四十七士の法士師直が屋
敷へ入りしと押ある大星達は表門を以向ひ

見を以望するは表門甚だ堅固にして容易
越難し其時大星富茂法を以呼びて其の
八重門の要害不堅固或は我を以向ひて速
乗り入り下下下下下下して力称が手を以て入
換らるべと云法太人畏りしと表門を以向
ひしは用害表門より速に大星が命を以傳
擲手の人数を以て俄表門を以向ひ大星列を
北四人を以率て速に表門を以是るは時師直が
事守人は体を以て大いほ怪し致を以全せんと
せざるを味村三郎を以去り其て彼番人を以
我を以は不し其て故を以討去之は必し其身を
發を以殺し其て是番下の柱を以くくり付て居
坐るを以時原郷太人の女屋の屋根を以階子
を以殺し其て乗上り家の棟を以焼りてを以
見る小十四の月夜は其るるを以屋の如く積
るを以腫らりと其中の隅と一目を以見し其

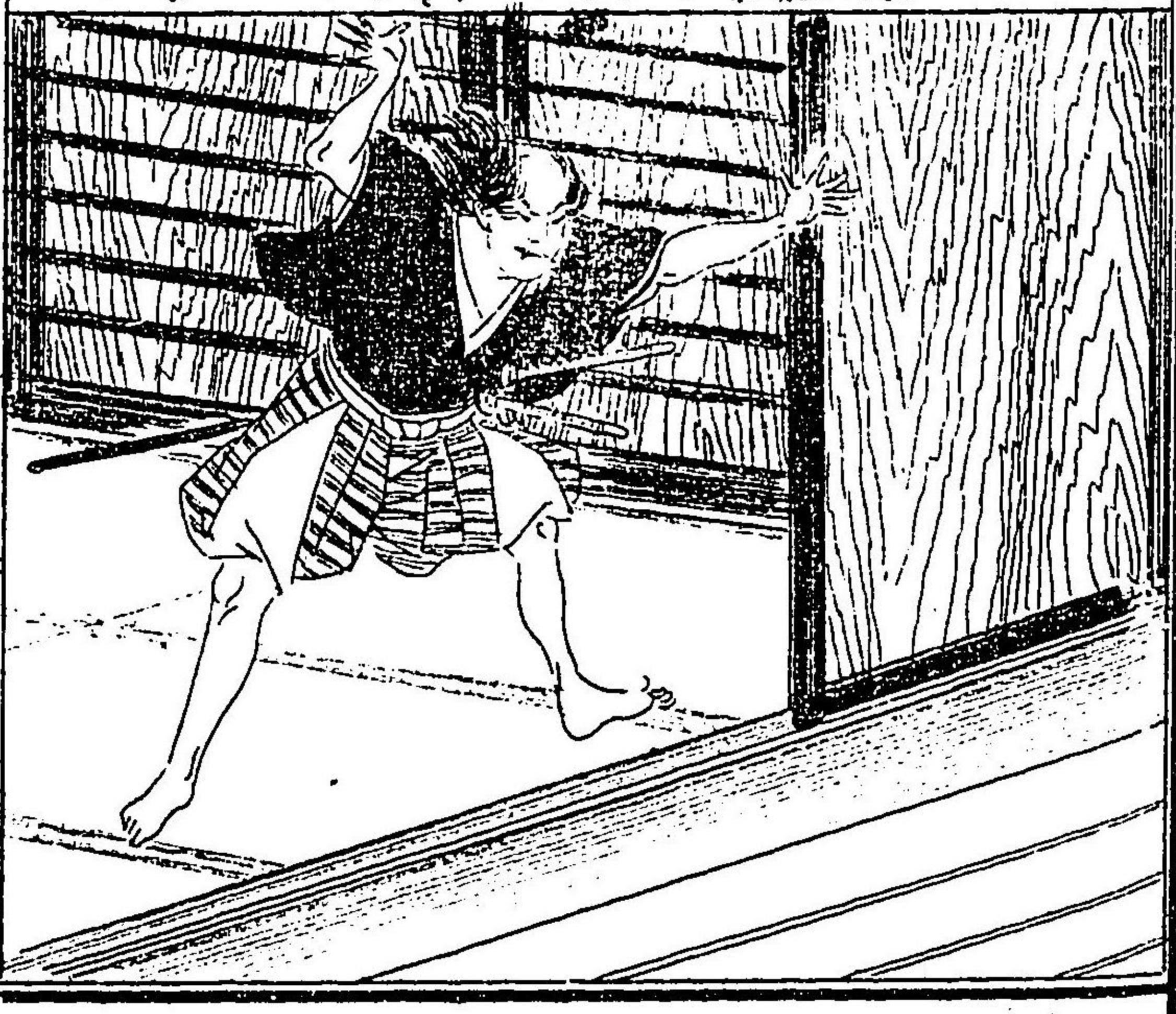
堀部
送られ
家の繁
は其れ



遇て雪は降き入り屋根合破と海らなる
 是は後して大高源吾屋根合指掛を
 の中へ下り下きて裏門を突らんとすれど
 分候を固く撥し固くき振られ大高源吾
 を咄らば横川劫を御味村三郎を御島平
 本ら惣掛を以て屍を裂け竹藪を多八谷を
 以て極を折き各一度は進み入夫田五郎を
 勝田真左衛門表門へ走り門番人太はあれて
 徒を以て表門を突らハ力強が同一は強入
 退も搦手一ツは成値へを以て押入有極百千
 の番士の今落知るが如く千層層は中太ま
 振損途を失ひ我先よと逃迷ひなれは美士
 ら思ひ候は人数を抛り横川劫を御島平
 十をら極夫を以て其関の戸を打破り言
 は目称たるハ故徳谷判友が家来者の氏
 へ上君の徳を報せん為は向ふく有り居るに

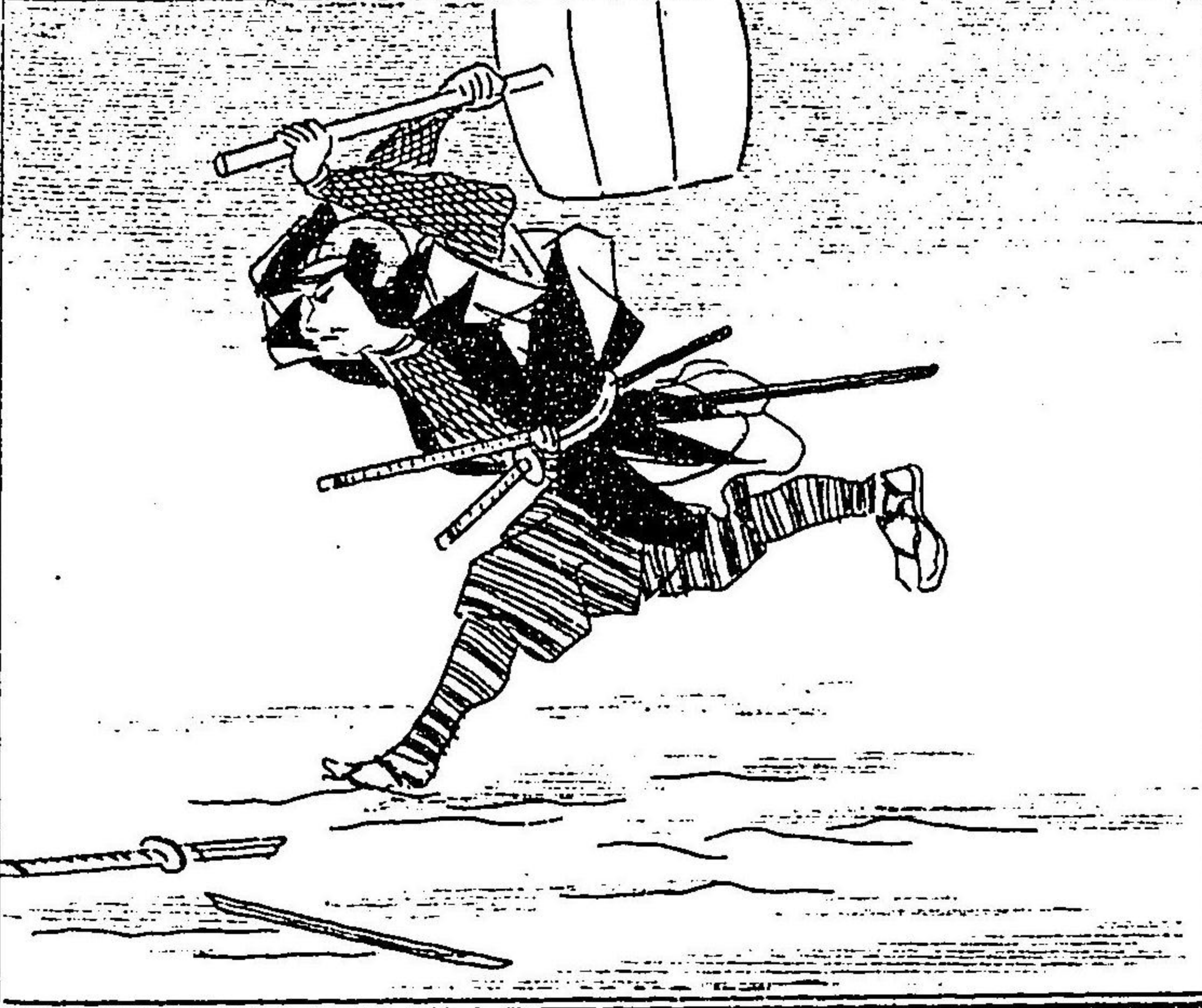


清本有て首を抜たぬいと口くよ
 四方をらとんで殺をもむ振振る徐又軒の
 垂氷は光を奪ふ手勢ひ破竹の如く成ん
 れハ師直が家中の去せ肝を洗魂を流
 し方合去更まはは愛は仇家の隣仁木至
 我ハ師直が家中深動塗車はあはと自叙
 卒家士を後へ界も聖んでをては折合んとせ
 せんが小野古十内原郷をら片山源吾を
 探越は姓名を名をりてはホハ故判友を貞が
 旧士を以て今宵師直を返故主の仇を振
 中をらお救は桂系仕は清隣家はハ法恨
 中事ハハ火の用心方出るもよく係清隣
 家の事ハハ車又柱がく清か勢と清産ハハ
 長非は及じやさば一夫仕るべと如何も神妙
 中なるは且枕をく忠美を感とられなるや
 鳴き辭てぞいられける



美士師直が家士と戦ふ

大星由良の脚先は玄關の正面まで進んで何れ
 進めんと下知されぬ美士の面々何れを以て控縁
 き我れんと突をむぬる下は玄關の次のるは計
 とる侍三人抱えの刀逆を振連て討ちける松村
 三大夫直一番巻と名乗忽ち一人を突殺は是
 り後て大星清なる横川劫を清と名乗て瑞
 る二人は渡り合ふ外味村三郎なる次は岡島
 八十をいついて堀部安を清及び不破致なるいで
 千崎弥五郎と姓名を名乗り持物をも引
 捲て切て入大星清なる八人は先を逃れれど其
 きいぢちとて惣て一人の侍を真ニツは切刺しけ
 殺勢は怖れ残る士刀を引て逃行を横川千崎
 のは追と追て行美士の東をて用なせし床後
 のどく成おは備罫を指火を点して一る毎の壁
 戸換は五六ツ宛をとりしる死然白中のどく思



ふ怪よを働まがる大星すうとに玄關は傍りる
 可の柱をまぐり討初る岡島八郎をより居た
 り也侍を搦来り師直が居るをやとバ命を助
 けは下と利立てをい入は師直客のるは美士
 十五六人乱して切懐なき侍者致美の軍兵地違ふ
 がどくす下不破玄關の左の方侍の休息不入地入
 るれは玄關成侍大小を拵取りて居しりぞ致をらあ
 るを惣師直が居る業内をばき下と下方が命助
 巻下と下と往全く拵去存せしむるくむ色もまぐり
 たりれは不破版をま餘りは面情と云ふや
 腰のつがいを切て放しり不破居お初の人
 或は彼侍行美士をば居る侍を息絶る不
 破赤さからも咽てまき見るは松村く先へ
 をむ横川をむむぬる劫を清何るやんをたて
 不破の侍をたてあ初味をえぬ我一人んも
 残念と云ふ劫を清を美士能見れ行美士をば



寺 師直 車 因 門 勇 力 震 不

分るは死に居るは縁も切らぬ去而きて
 人想先を急ぐ内は後遺りよき英を八極優
 長成人のまじり英いさ士奥の切下入る不真
 の方不付六人殺連射其孫八郎空原忠太郎
 原兵を齎着十兵衛宮社庄本ら松山をた
 乗て地着る大星清左の小群も十内因野根を
 石津孫九郎堀部安兵衛奥田孫大夫は敵は渡り
 合火花を散りて切捨は渡をのび芝原と渡り合
 べが有戦ひいづよ足清左の遠き見て并込刀
 おやまへいた太郎が小勢先分順逆初下れんと
 偽て伏し孫九郎孫八郎は渡り合孫八郎も命を
 軽介一尺も利す働くまを流石の石津も汗をい
 して切捨は開血刀のば地着る是を捨んとす
 孫九郎を殺ぬ因重助太刀は及ばばと一歩歩
 踏込て相討は孫八郎が看るの真中より竹刺
 は三ツまはし見えて踏る四人大ひは悪れ真をま



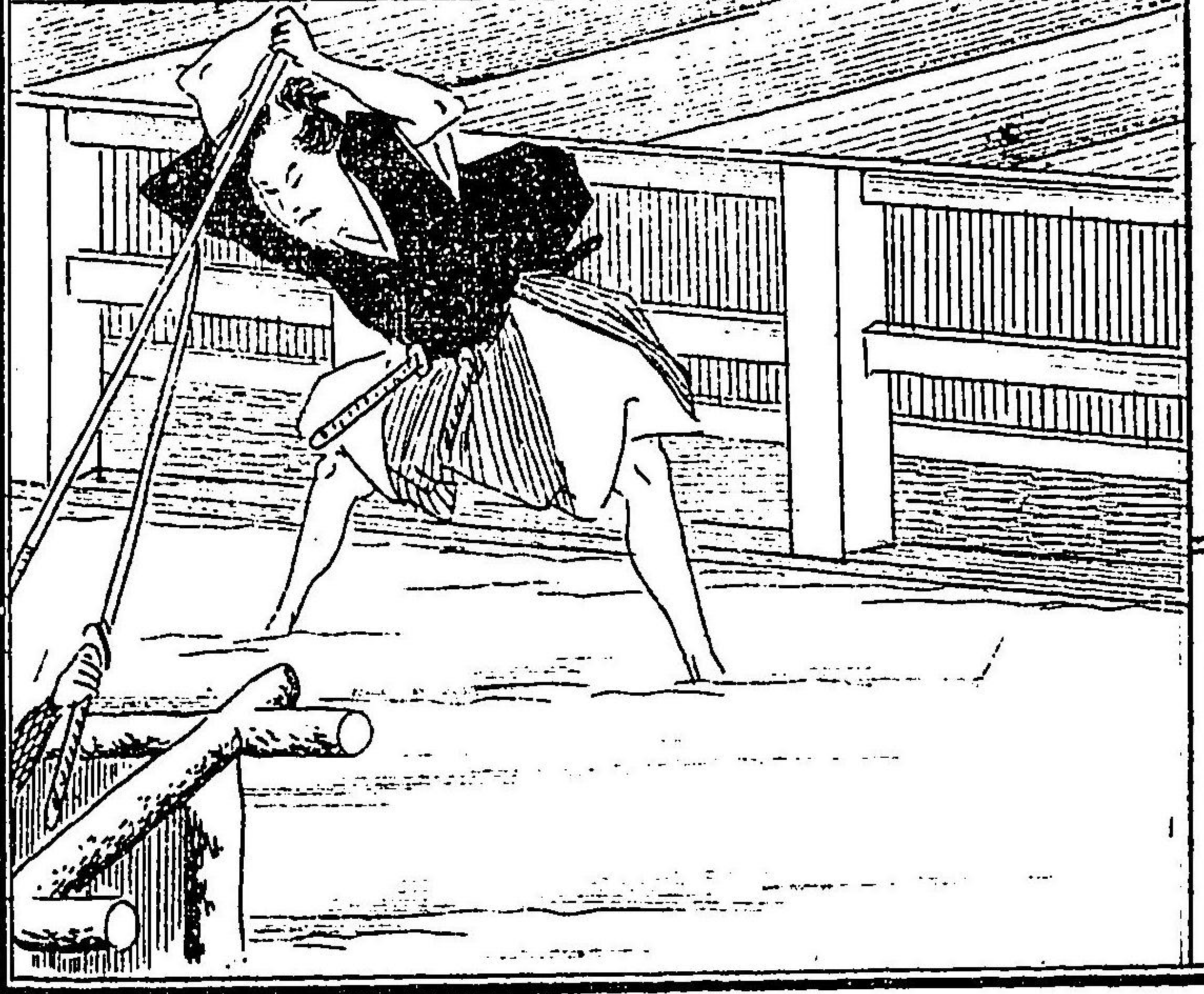
知度松
 左右田
 戦ふ

えて逃入るも堀部奥田の勇士返さず抱き
 と逃て行枚原兵をたぬ居らつとま真う
 つ向はつぱんとする不も真田孫大夫後を襲
 一初殺し官仕松山易を見て命恨りと逃下
 ぶ士をぬてもを逃に而直目急切て入逃付て
 きを産まて働らくも死傷のものぞらすを
 ありざりたる

義士勇戦多江長期
 大星力称を才擲まの大将成りかまは性操
 の仕を九面への働らき浦山を思ひ指揮さ
 小群も芳田は渡り港をたて突入しんとす
 向は山原の士郎接合て討る力称港をぬつ
 て突は村を大星清左と名乗刀をまぬ向
 き切付る力称小者のぬる者上は港邊で切
 掛は互にまわる士士成はつとらとまはさし
 力称港を捨て力を捨て切付る大星清左は



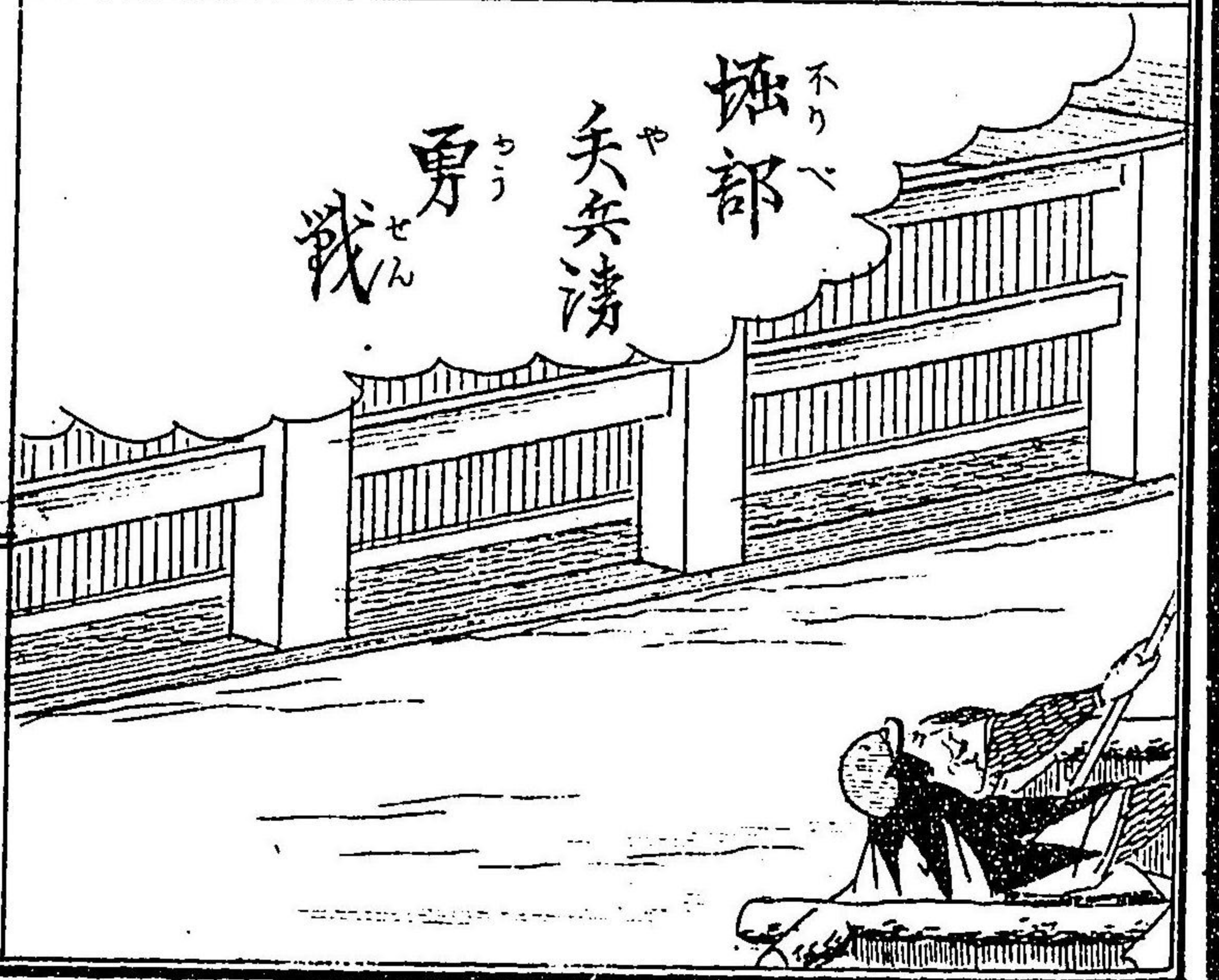
てきと有引返んすも下き刀称透きし退懸て
 丁と切大塩沈んで又首る刀称返り刀を横振
 る拂ひ一の大塩がも服懸首公あま子清り
 たる横ひて芳田仲をの同本沢本小せき妻を
 味村三郎をの千崎林五郎赤垣源藏千備三
 郎を清我をのと破竹の勢ひを振ひ切立く猛
 丸の御さき面を向い去一人として生て逃るる更直
 度より師直が股腕のほき江波をらと名乗て才
 の大六又怪傑の大の男三入八寸の太刀を振て勢
 向い佐藤子茂七長を向い五は剛を削りて戦ひ
 しがまのれのおらに飲一ぐく子茂七既ま危く
 入へりしが中おれを首ま戴き射ひ込んで突懸る
 子茂先をのが投をさぐる小突れおれをへ
 どいと倒る侍の傳らると地考下を治を伏ま
 り子茂七が足と膝を逆の子茂花上て徐を
 尚備まてもら首をさると弁八服玉花ぬけ死



一たび二回とんと突ひたる

堀部夫去清到筆家

爰は堀部夫去清の勇士六六路八十はまんく
 して北も勇気のお士茂なるも美士の方足と
 養意をん老まや大まよる計事と女は手足
 を持たせ首射りて藤くけり既ま美士者桑す
 と種夫去清未だ睡り覚さか存着条をら坊
 部九十郎とて二人の控子有一が叔父の依
 孫入るるを以て又制限移れりと直人あて
 老人を起し左を助て種夫去清を看せむ矢
 去清はおきてりりと引抜り試とて今我の
 勝負も未だ長くと備七八十切按七八なる
 鳴しく快はと打突て妻子は長き別れを
 告二人の控子は助られ師直が妻へは向
 り味方の人と門内へ入て破門を堅て戦
 内へ敵人の嘆き叫ぶ声あへりる条をの彼と



は抱ゆりて片端は指をさしる指子をかきり九
 十郎と古入りて指子を漸くは門内へ下り
 直人も傍てをさしる愛は巨星有人翁が二
 男は巨星三平と云ふ有巨星が先途をん
 届んとす小思ひて夢中の内は隠れ吾ら
 がもさえて急ぎ去る清がよも来り素湊打
 カベと玄園にて案内十由良介其をえん付
 矢を清よむひ足下の延引んは驚りくら花
 目ざら故はまどと進に闘戦半そ元老本
 の才まれば家の内は有て美去を下知せしむ
 とぞ中々の傍り我家をさる中と用はまき
 体は八んさるじり二人の子もん昔く思ひ
 一がは下はなりて身は燥然とて真光を
 と多結引指差去とも清をたて乗を目録て
 走り行く指子の養ふるは美去をば傍て
 着奈たは傍九十郎巨星三平表むと切

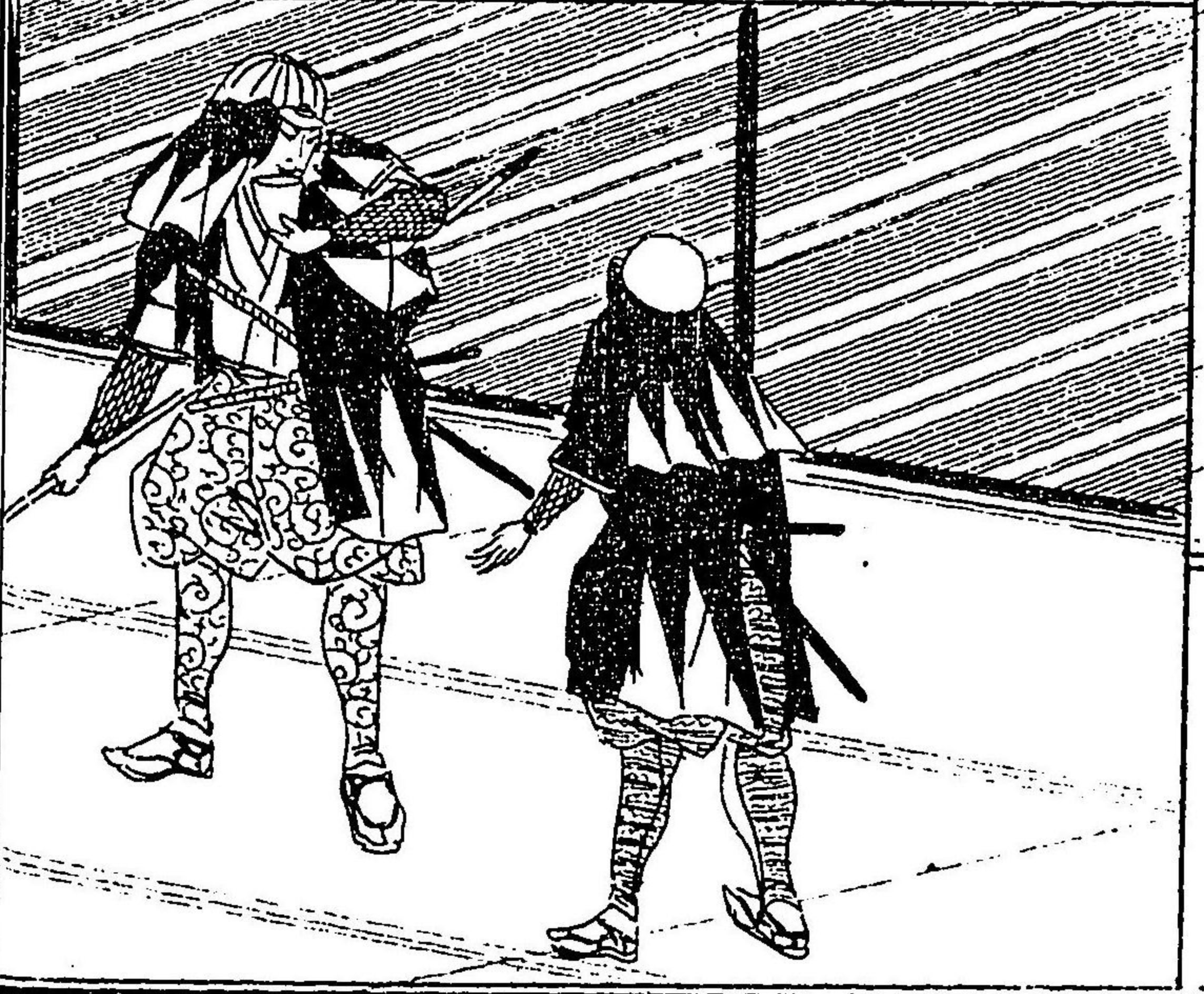


人んとは巨星を制止三士の武勇は
 恥まき去る存あり他人を憚りけと堅く
 節は下ホ左様と思ひあはれ汁ひひと味
 を含めれば三士も領事又一振を越てさ
 傍れを迎うと去るに様を越て清もさる者
 んと夢中の思ひ細細一様を切替るもの
 を計えお待たる

お資松左右田借五郎と戦ふ
 却流すの師直はき世後病成りて悪
 伏の味を巧く一は拍着の勢を味し
 起すり後下は進んたとさかれとさき未
 とふ散立して多の鉄は彼方と途途と
 邪曲の人成かあよ者とせればあち後
 士が跡へと隠れさる得ざるも巧之屋
 家内の付根根強き若し退れんとす
 但勇を奪ひて切込り素はあつんとす



刀が但猛つて射入れば進退の途を失ひ
 押合へ合途途途中の内男女存をさて
 泣叫び大屋下知て欲戦ハ村をへさま
 きまごもはあきまぬ内を堅くご入る
 ちるあきく静り陥つて震ひるる中道
 の急聞いよあられされん進退の途
 半手を射込られはほて内秋所秋所秋所
 九郎を清天降て進長細を以て備りある速
 元又野手を持太刀をさして切狭い双方極威
 を奉ひあきを震いて血戦は残合持る手を
 遊せて秋所を目かけて丁と射る秋所因て射
 通されを伴てい傷れりるふ大の男
 備りお大体をえて投付られ灰散乱してま
 士未の目の中へ入珠ま危くへんじが会播
 備小大まはあきで彼未を猫と切し灰散
 くとて見んは保つて柱を三すりぞ切込



だつは勢ひはぬれ松竹天降を振多くの土同
 まつとあつて途込らう残合途途途中の内男女存をさて
 野を渡り切付れ二人死居ま傷れ伏着まあ
 突松勘六八奥を指てをこ入る産口は左太
 田借五郎と名乗来太刀をさし戸口は左太
 款を入させりと文へりあ賀松考を想て
 天晴款やま利まをまうつて切狭い双方
 獅子の姿もあき戦いり残合秋所もを
 助んを想じらとあき松考を渡ら一彈を
 切込むあきまぬ内を堅くご入る
 振るる下り庭を指て途込らう残合途途途中の内男女存をさて
 まつとあつて途込らう残合途途途中の内男女存をさて
 真備は傷れ浮れ沈むるあき左太田借五郎と
 えてはあき松考を切付れと鎖帷子をまわれば
 括てはあきまぬ内を堅くご入る
 きけまを助けよと見れば秋所十五次まで

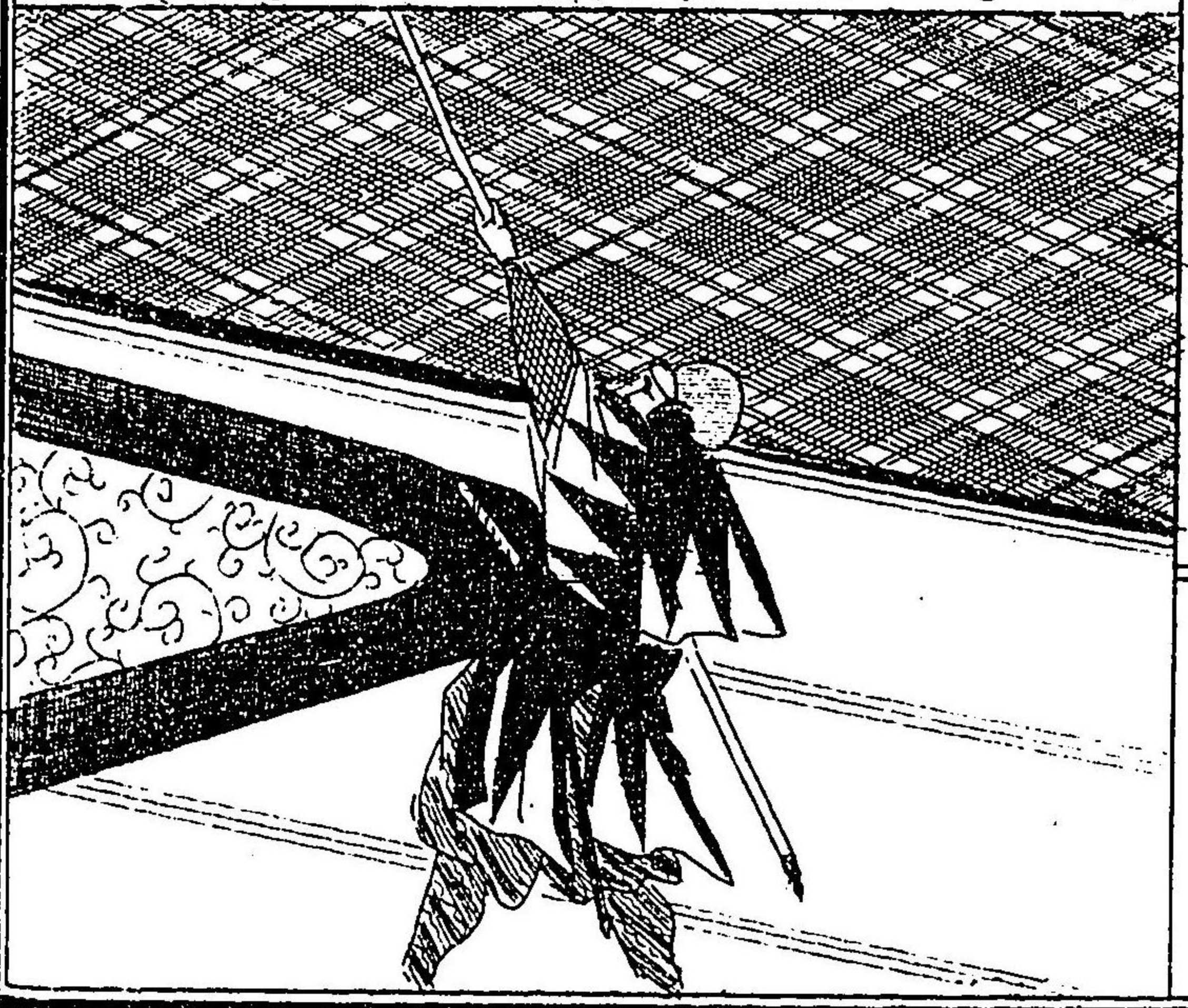


諸士直森入
 直森入

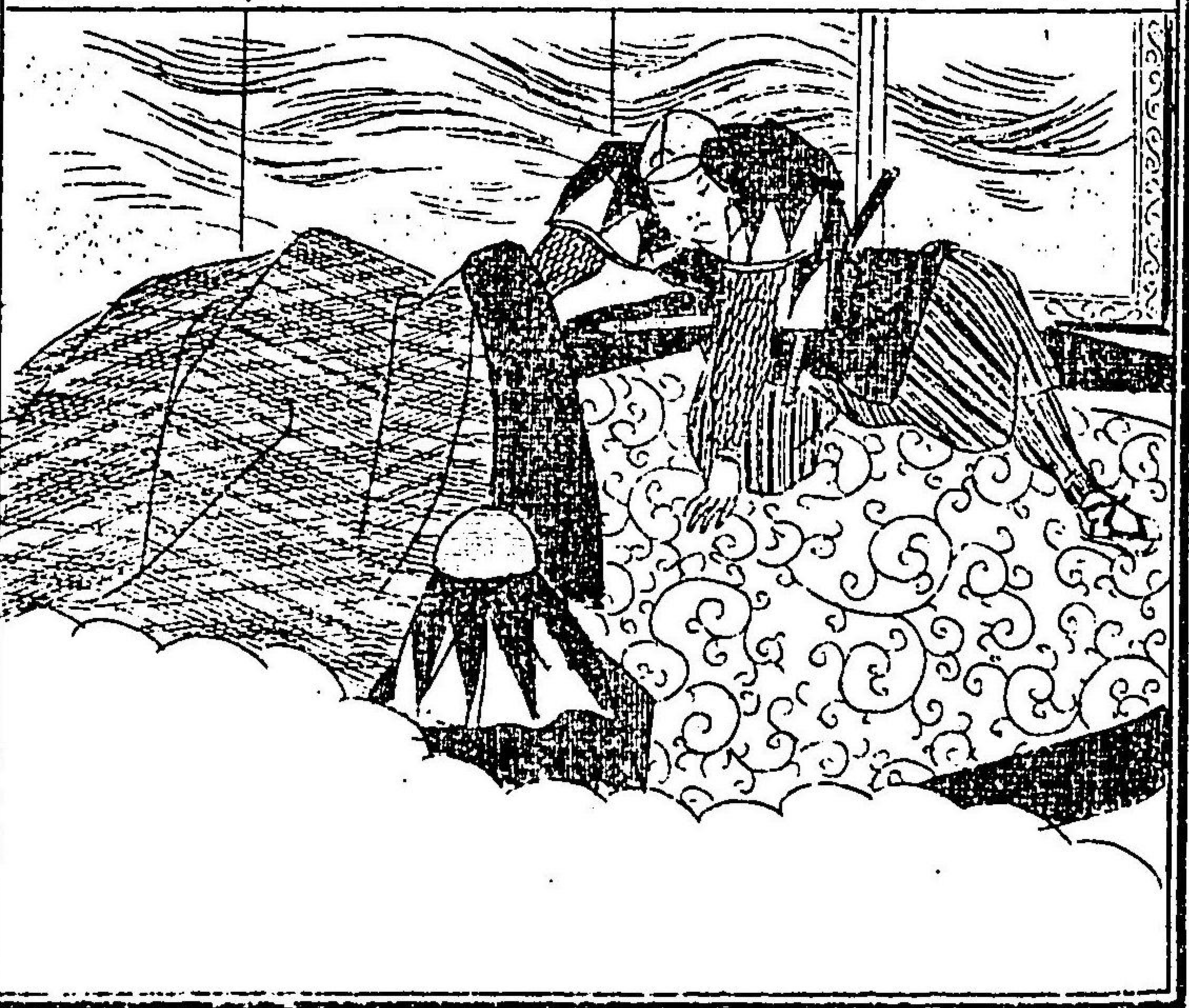
侍五郎は涙り食を俵はちて松の樹とて泉水の
ていす情なき奴と我はてお討よと切らうと
寺岡平次ら八十二人目有秩の楯を志あるさ
向ふ者を打倒し秩の楯を血まじりてせむる小
屋の口より美佐五六人一同に後連て寺岡目録
切殺る平次ら事どもせむとて奔侍が敵を目
録打らるは前よとせむ二人徹奎よ来て碎死
を残去とも見せ見て肝を潰してせむれんす
跡をまじりて逆行を苗をまじり井津く也
りたれは毛が若も命をさほすものせむさうす
誅よありくぞ見へむる

橋本矢を渡り戦

妻は橋本矢を渡り先程の橋本木の下をさ
て番はしむ彼木が倒れまきとて好むと見
ふ妻も花くさる働まきまきとて木を目録てま
逆行よ中の石の如し四十餘りの大男大女を



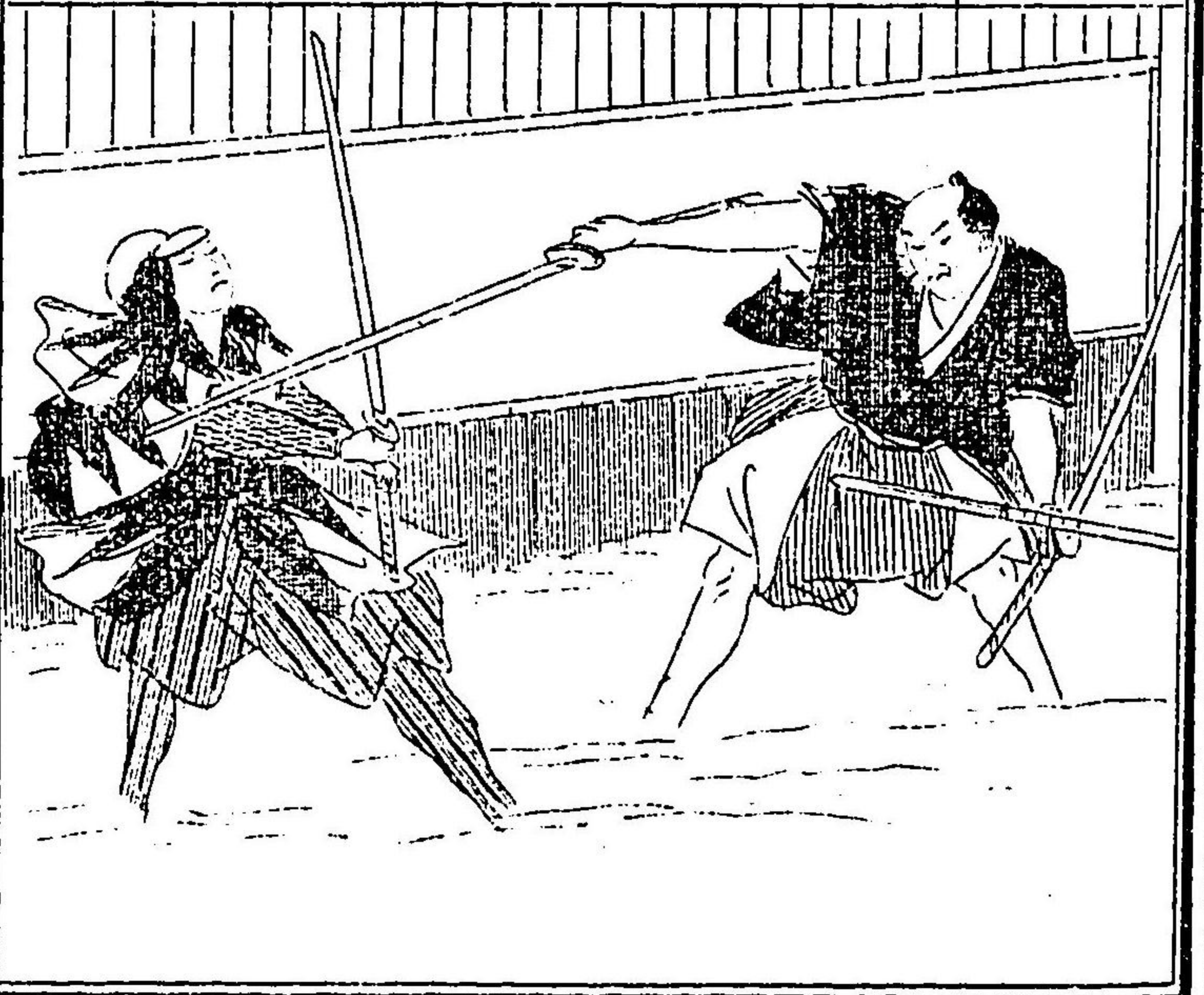
さして待たしむ橋本透さし彼の男と渡り合
が橋本が陰先尖はして老の杖の刀を巻き出し
胸板を突通し楯先飾りて向ひの楯を突き
たりする小僧橋本源左と名乗捨捲て浦が橋
本を目録て殺る夫を渡りしは合戦術を渡
て殺しむ橋本が武勇の速去橋本が老の平垂
本往左往右打合しは小太夫杖して殺し自由
かまされ居る人おて伏すや合と橋本跡にさき
きか誤て廊下を踏よむ古井よとて海はしむ
橋本はさりとて操り飛び下り古井を目録て殺
直し橋本を一突まきまきとて突はれ橋本透を
に橋本が巻きとて入極をばらしてはらと傳ひし
り刀を抜て橋本が真向刀を任せて切付れ縁
左んが首をさしむ付割り八弟と殺こそんえんや
美士師直が若様小一



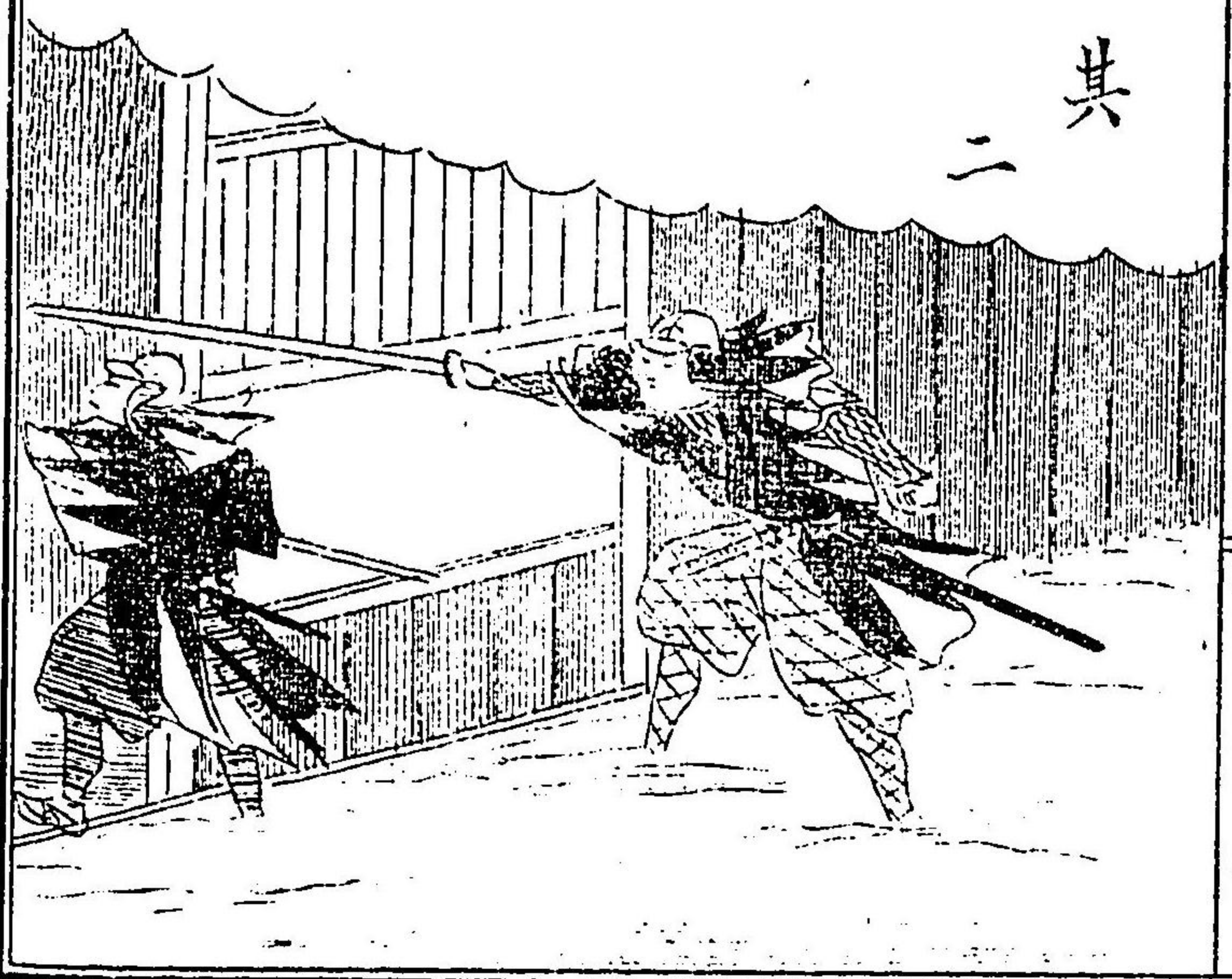
不承をきき驚い登天眼通をばらばらせやうは
 控て丸きいばとんを安んが身を縮めて隠れ
 るされ美士の面を遊るは切返は矢の折六書
 院の内にて茶道を捕へ汝命惜くハ師直が居
 るを案内せよと責められ彼茶道浅るが師直
 が保下を案内す木村岡を茶道よむひきお
 よりの働きは味なきは湯をさし下と云たれハ
 主人の茶を好むハ沸湯ハ危中をばらばら茶の
 の湯をもてばらばら青き湯もて身をつまみ
 茶の湯は遠くると弁火ひやく師直は居る
 案内せよと責められ茶道先よきて勇は連行師
 直が森をばらばらとていはいんをすれども内
 二枚を指堅めなり波谷米し巫女を蹴放し
 て内をばらばら殿子の教は三三の蒲團をば
 刀櫃は刀の有り師直は見えられ松村若平
 大星渡たの敷天の中へ身を指入て見るは森



肌残りて暖成は遠くハ行くと天井は漆を入
 様の下半身を射ぬさび米むと鐘を在示
 知れされ美士赤勇極の心も折れぬハ師直
 を討腹一つの口惜きよは奉月肺肝を挫き
 引道子奉万方を立て今日よまう仇とまう
 天道よも挫られ神明よも悪まれらると眼
 をしらし歯さくひまはらぬ由良介小へ
 撒し有下と見ひくハ珠の情負弁の刻
 と定めたり未と時刻も程あれハ一度披さる
 べと下知すれハ皆ハ思ひをけられるさ食
 んで我先は勇のるさしてぞ切り入しり
 美士達本望
 美よ言師直ハ保下よりぬけきて美士ホガ
 扶求むるはとと道れ進行後りよ兼て要言
 は捕屋企なる基下と庭と少し登れてお企の
 経約登の内へ思ひ例は信三人を後身を指

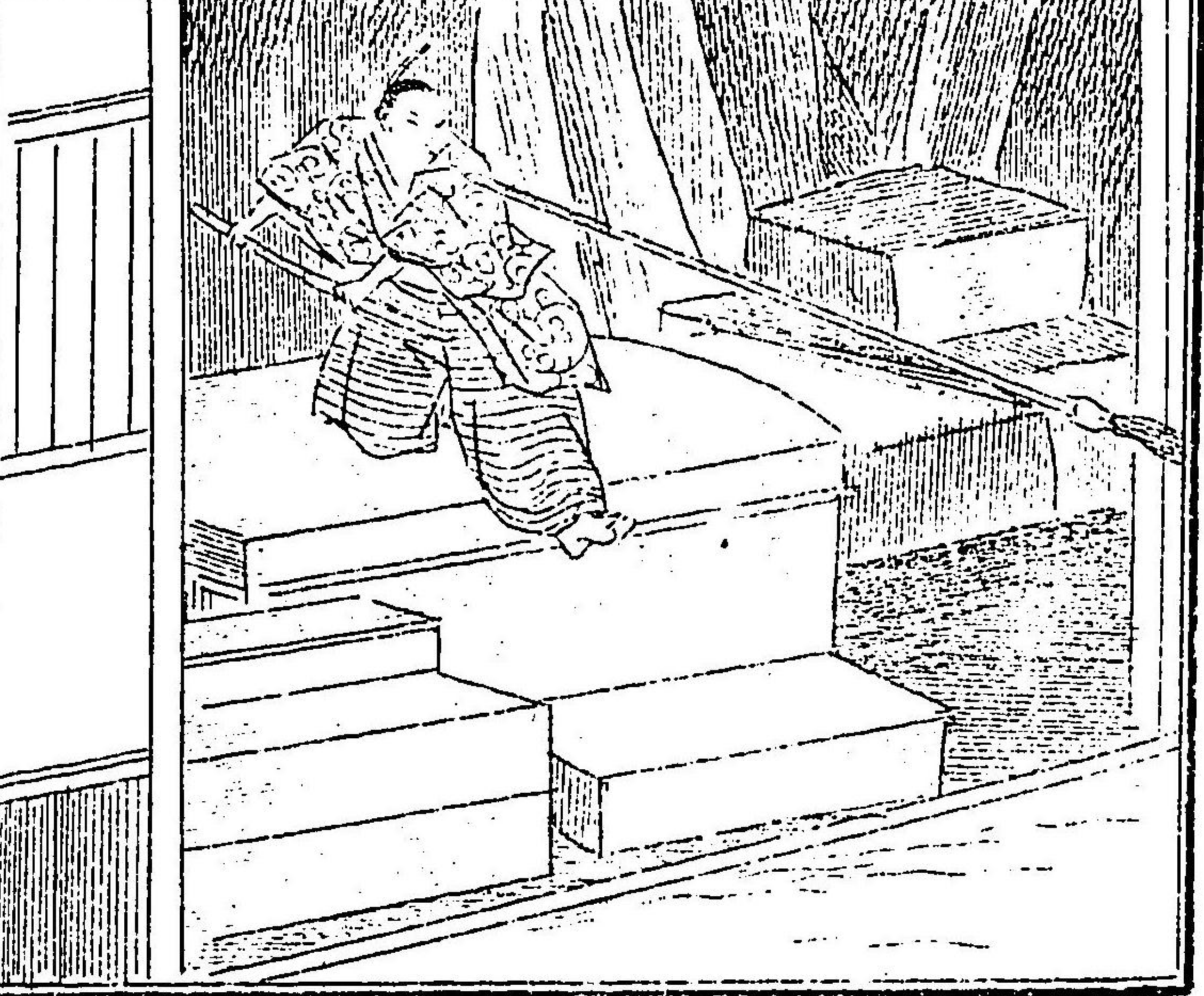


てぞ母を殺れりるるふ芳田作太夫の夫も重
 太郎維新屋は人者ならずは又へく甲くも
 色も付地帯も色もするは三方の壁はして
 一方板をさし入り重太郎は後不実をたて
 して打破るは勢ひ以て車成板の徴蓋
 まかりて傾れり其をすじ見るはくろい
 物のお色も見る登り時は重多八重太郎を
 今んとすを片山磯合見をえて如何板成
 係事あんも知れ難一本太を達しやさぬ中
 八重太郎の命之達り有半可を討殺れり
 下知の下人し並ひて指指引はめさんぐ
 村さし入り爰は控てしひ登りや維新屋の奥
 より切先を捕へ踊りける師直の家人を
 小三郎と名乗て渡り合其田員なる十文字
 の巻をたのいで生一突は突殺す續て多喜新
 九郎切てあるを海笑称なる早野称助とち

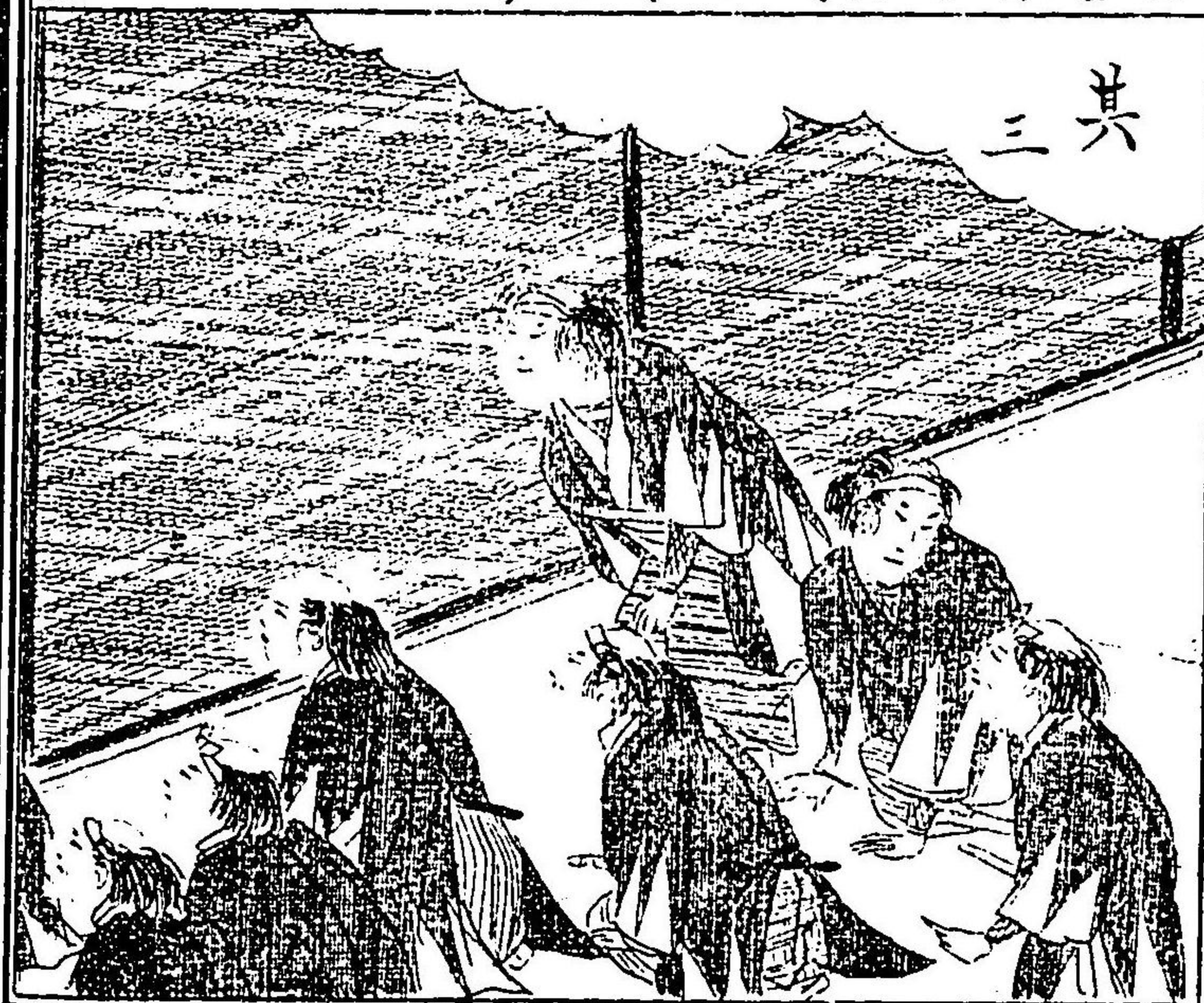


其二

控んで太刀を合す磯合十郎なる長刀を元
 死て新九郎が首を一斬りけりける元
 又人の見まできん中の人八利由は竹藪を
 多八矢も重太郎も人ハ先有は内党違は
 と火をたきて透し見れば其の角は人首の
 上は壁の方より産りし相とぞと竹藪矢
 乃の有人涌入て何者哉ぞ名乗べし再三
 いども答へられんは多八太きは彼をさす重太郎
 一當あてよといふ事ありむく下を十文字の
 巻まで刺さ突くはれながら刀を抜て拂ハ
 んとするを竹藪を多八抱抱て大勢沙粒に
 切さば色を見るは重太郎が突くは後
 血流まで面割らばそれより角をさば見る
 りは外は人はさすは下探の下やよ及ばば
 のくも或は筑山泉水の巻まで巻を入れて
 さび見るは師直面ハんず由良介はむとつ



けるは大星やうの八槍ちハ一人切殺しとる死
 骸さいちく攻め吟味有下と陰吟味はま
 さもやと覚しき共は竹本と矢るが徳を付
 一鞋部屋の人を怪しれと彼不承りこ
 れ血を色替し衣被なれども債と見ゆれば
 水まで面を洗ひ見よ年のは六十餘りと見へ
 ねせ垢の下美まれば毛を師直取らんと
 掻きたる斤山破合去年の法後依てま
 見覚えれば一目見直り師直取らねば
 と云は重太郎も衆八踊り上つて悦ぶ幸限
 直十郎左の髪の中と腰を見るは故殿の
 切付ぬいし法太刀跡あり破合斤山双眼
 涙を浮け法懐念亡妻の法太刀跡を珍しく
 ねしまると数行の涙涙尤もこそ見えは
 竹本矢る大者まで言の師直を極谷判
 官百負の家人矢る重太郎次は竹本共



八五人して討まうと三度まで呼はり
 たりは家を使岡島八十を横川勘を清ハ
 屋振は有り八十を八槍持をせよとせ
 おる、却去清ハ措子のそばまで行く遅いと
 屋振の大棟より飛りしは大の男よればあしを
 横して鎌征痛くも余りの喧しきまおの
 敵ともせむとちも味を柄あつて味しや本
 夫を連しりと悦ぶそ介の面を地来りて
 悦び發ぐや四面に響き渡りたるは時竹本
 共衆八師直を討まうぬれば糸法首を上ん
 とし心を咬て矢る重太郎弁笑ひ一番は徳を
 付ハは重太郎成ハ衆六を首を上りてす
 下口満まるばんとに由良介手中に入て双方
 尤の満之者より戦場までなぐればの満あり
 糸がや亦さやあし重太郎徳を付ハは衆八
 切伏しお付とやハは衆八人も一番のる

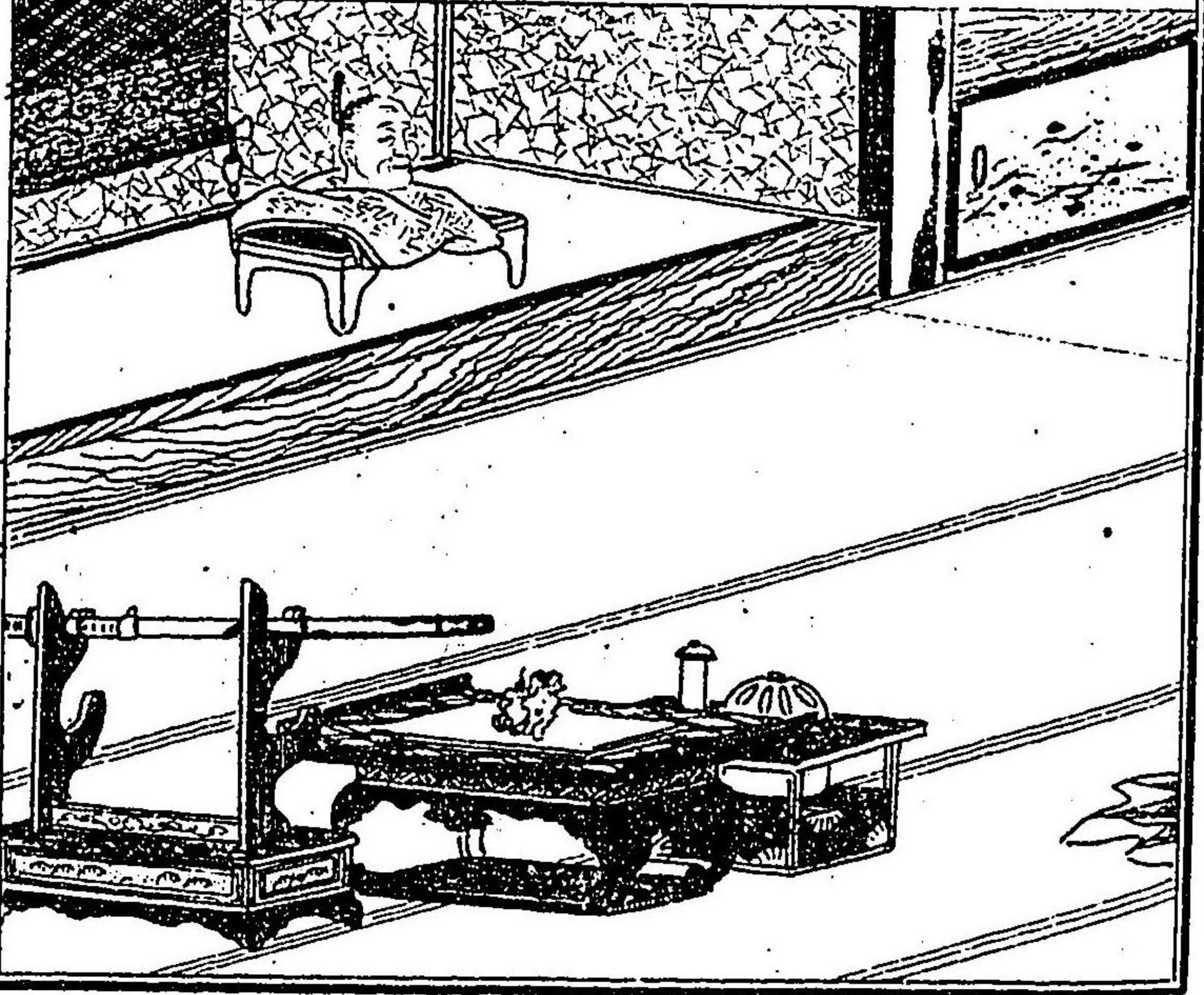


名は猪券なり依て重太郎の首を指す多八ハ首を上るべしとて大星懐中より亡君の拜領せし善光の九寸五分をちりて重太郎は清に竹森矢る見をすてよとと笑ひ重太郎短刀を以て止めを指されば多八地よつて師直の首を上る由良と介則師直が小袖を以て首を包と善士の面くを百連法座の首を振り首を床の上より上り由良と介を斬め四十餘人次の首は退き一流は平伏するは時由良と介首は向ひ去奉三月十四日暮の岡に於て主人も真又備よるに下本を速くした法各付付られ當日真美切腹する真が未だの猪毛の短衣れがく存は女子幸為昔の度ぎ今晚時希る未だ法座の清紋も入りしに桂素仕り下は清不運の故は清とせりもや清命をぬめられぬら平の清の法座の法桂素



其四

仕事より見分高員が善指下泉成寺清住仕あれよと首は清面法座に下せるをく由良と介の四十餘人進付泉下の清住仕れと再三拜進して清首を光下して竹森矢間直人清してきよ同衣の面く下知し座間の中は指する備焼を悉く元糸て長を清跡へ水を打つる臺下金の下を初め火の元有平八大方あを打たる後大星を破四十餘人利矢と相とぞは奉月付祝ひが今社本を速くしつる清の法座の色を掃たる鳴守後徳の燈きや夏新香焚四十七士の人口の娘の娘の娘の今日よおて指す折骨美人百年の今はある世世の人口は貴ぶる文は撰とて勅書御殿の手本忠臣の短衣と仁美禮智佐の五帝の教とまざるべし



繪本忠臣藏

繪本忠臣藏四篇 十八年三月十日出版

繪本忠臣藏	自初篇至六篇	繪本源平盛衰記	自初篇至六篇
繪本里見大傳	自初篇至二十篇	繪本曾我物語	自初篇至二篇
繪本三國志	自初篇至三十篇	繪本佐野報義錄	自初篇至八篇

明治十七年十二月廿二日出版御届

定價十五錢

編輯人

大阪府士族

長瀬忠次郎

北區堂島東通二丁目六十番地

出版人

同

平民

濱本伊三郎

東區北久太郎町四丁目四十二番地

岡本仙助

東區本町四丁目五十二番地

毎月一冊ツ、出版

